応用生態工学会ニュースレター　No.65

Ecology and Civil Engineering Society（ECES）

2014（平成26）年8月8日）発行

〔発行所〕　応用生態工学会事務局　〒102-0083　東京都千代田区麹町4-7-5　麹町ロイヤルビル405号室

TEL:03-5216-8401 FAX:03-5216-8520　E-mail: eces-manager@ecesj.com　HP：http://www.ecesj.com/

〔発行者〕　応用生態工学会（編集責任者：幹事長　藤田乾一，事務局長　小川鶴蔵）

１　はじめに ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

２　応用生態工学会　第 18 回総会　案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

３　第 18 回東京大会案内 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

４　2014 年度　海外学会派遣研究者・技術者の審査結果の報告 ・・・・・・・ 28

５　幹事会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29

６　委員会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

6-1　会誌編集委員会報告 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

７　行事案内　平成２６年度　応用生態工学札幌セミナー ・・・・・・・・・・ 41

８　行事開催報告　第４回　遠賀川中島自然再生研究会 ・・・・・・・・・・ 44

９　2014 年度年間行事予定 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

１０　事務局より ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 48

１　はじめに

第 18 回東京大会案内をお届けいたします．発表数は、口頭発表がこれまでで最も多い 45 課題になり、ポスター発表は 74 課題と、盛況だった大阪大会と同様、多くの発表が予定されています．　公開シンポジウムのテーマは「地下を流れる水と応用生態工学の接点―健全な水循環の確保に向けて」で、これまで情報が少なかった地下の水を理解する試みが始まろうとしています．発表セッションの名前も、湧水、物質循環、河口域・干潟などこれまでの発表には見慣れなかったタイトルが出てきました．

エクスカーションは多摩川と東京湾河口干潟を用意しています．どちらもなかなか観察する機会の少ないコースなので、ご期待下さい．

このほか、2013 年度で第 3 次中期計画が終了したことを受けて、次期計画作成に向けて、応用生態工学会研究活動の活性化に向けた様々な取り組みが行われています．幹事会報告、委員会報告をご覧下さい．

２　応用生態工学会　第 18 回総会案内

第 18 回東京大会の３日目、9 月 20 日は、応用生態工学会の　第 18 回総会　です.

応用生態工学会　第 18 回　総会開催案内

応用生態工学会総会は下記で開催いたします.　正会員の皆様のご出席をお願いします.

第 18 回総会催日時

１. 日時：平成 26 年 9 月 20 日(土)　10：30～11：30

２. 場所：首都大学東京大沢キャンパス　12 号館　２０１教室

京王相模原線　南大沢　下車

なお、**総会の成立には正会員の 1/5 の出席が必要です**.　総会に欠席される正会員の方は，すでに会員メールで送信済みの委任状に必要事項を記入の上，**9 月１ 日(月)まで**ご返信くださいますようお願い致します.

なお総会資料は，8 月下旬にホームページ上で公開する予定です.

３　第 18 回東京大会案内

応用生態工学会　第 18 回大会案内（東京大会）

2014 年（平成 26 年）9 月 18 日（木）～9 月 21 日（日）
第 18 回総会・研究発表会・公開シンポジウム･自由集会・エクスカーション

１．大会概要

応用生態工学会では，2014 年(平成 26 年)9 月 18 日(木)～21 日(日)に東京都八王子市にて，第 18 回大会を開催します．

9 月 18 日(木)～19 日(金)に行われる研究発表では，45 件の口頭発表，74 件のポスター発表が行われます．また，自由集会では幹事会主催のものも含め，8 つの集会が予定されています．

9 月 20 日(土)には，公開シンポジウム『地下を流れる水と応用生態工学の接点－健全な水循環の確保に向けて－』を開催します．前半の講演の部では，イタリア・トレント大学の Walter Bertoldi 博士，総合地球環境学研究所の谷口真人教授，岐阜経済大学の森誠一教授に，瀬淵スケールの伏流水や流域スケールでの地下水の動態の研究，地下水と生態系の関係の実態や保全の現状についてお話しいただきます．後半のパネルディスカッションの部では行政の方にも登壇いただき，さまざまな関係者が活発な意見交換・情報交換を行えるシンポジウムとしたいと考えています．なお，このシンポジウムは河川整備基金の助成を受けて実施し，一般にも公開します．

大会最終日の 9 月 21 日(日)には，都市域である多摩川中流における水循環と自然環境の保全・再生等の見学，または東京湾内にある小櫃川河口干潟を活用した地域活性の取り組み，干潟再生の目的と構造などを見学するエクスカーションを行います．

【会場】

○研究発表・総会・公開シンポジウム：首都大学東京　南大沢キャンパス 12 号館
　住所：東京都八王子市南大沢 1-1
　電話：042-677-1111（代表）
　URL:http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/access.html
○懇親会：首都大学東京　南大沢キャンパス国際交流会館内
　フランス料理　ルヴェ　ソン　ヴェール南大沢
○エクスカーション：多摩川中流域・小櫃川河口干潟

【大会日程】

9 月 18 日（木）

・自由集会「荒瀬ダム撤去過程から見える流域・河川土砂管理の方向性」	09：30～11：30	202 教室
・自由集会「応用生態工学会　テキスト刊行委員会」	09：30～11：30	203 教室
・ポスターコアタイム１	12：45～14：15	ロビー
・ポスターコアタイム２	14：15～15：45	ロビー
・自由集会「ダムによる水生生物個体群の分断と陸封」	16：00～18：00	201 教室
・自由集会「【幹事会主催】国土強靭化と自然環境保全」	16：00～18：00	202 教室
・自由集会「小さな自然再生が中小河川を救う！」	16：00～18：00	203 教室

9 月 19 日（金）

・口頭発表	09：30～12：00	201,202,203 教室
	13：00～15：00	201,202,203 教室
・自由集会「ダム湖における外来魚対策」	15：30～18：00	201 教室
・自由集会「河川空間を動的に捉える：攪乱による生息場更新と生物群集動態」	15：30～18：00	202 教室

・自由集会「震災復興に応用生態工学はどのような貢献ができるのか 2：復興の現状と課題」
15：30～17：30　　103 教室
・会議「河川砂防技術基準（調査編）をもとにした意見交換会」(傍聴可)
15：30～17：30　　203 教室
・懇親会　18：30～20：30　　国際交流会館

9 月 20 日（土）
・総会　10：30～11：30　201 教室
・公開シンポジウム「地下を流れる水と応用生態工学の接点－健全な水循環の確保に向けて－」
13：00～16：30　201 教室
・エクスカーション（小櫃川宿泊コース）
公開シンポジウム 16:30 終了後　19:00 木更津市金田海岸「民宿与兵衛」集合

9 月 21 日（日）
・エクスカーション（多摩川コース）　9:00　JR 青梅線「羽村駅」　集合・出発
・エクスカーション（小櫃川日帰りコース）　8:30　金田海岸「民宿与兵衛」　集合・出発

****

＜参加／発表される皆様へ＞

《受付》

・9 月 18 日(木)は，9:00 から参加の受付を開始します．時間帯によって，受付は非常に混雑することが予想されます．早めに受付をお済ませください．
・9 月 19 日(金)は，9:00 から参加の受付を開始します．発表者のパワーポイントファイルの受付は 8:30 から行います．
・9 月 20 日(土)の総会は，10:00 から参加の受付を開始します．
・9 月 20 日(土)の公開シンポジウムは，12:30 から参加の受付を開始します．公開シンポジウムのみに参加される方は無料です．
・9 月 20 日(土)～9 月 21 日(日)のエクスカーションは，参加申し込みをされた方に，集合や移動，注意事項等の詳細を改めてお知らせします．
・受付は 12 号館 1 階ロビーです．名札をお渡ししますので，会場内では必ず名札を付けてください．
・研究発表会参加費は，会員 6,000 円，学生 3,000 円，非学会員 10,000 円，費用には講演要旨集の料金が含まれます．大会運営をスムーズに行うため，事前申込および振込にご協力ください．
・懇親会参加費は一律 5,000 円です．当日，会場にて徴収いたしますが，参加者人数を把握する必要がありますので，参加の有無について事前にお申込みください．

《口頭発表される方へ》

・口頭発表は全て備え付けのパソコンと液晶プロジェクターで行います．パソコンの持ち込みはできません．OS は Windows 7，プレゼンンテーションソフトは Power Point 2010（Office 2010）です．Mac，古いバージョンの Power Point，あるいはその他のソフトでプレゼンテーションを作成される方は，事前に Power Point 2010 で動作するか確認を行ってください（動作確認用を希望される方は会場係に申し出てください）．また備え付けのパソコンは，通常の Windows 7 日本語版で標準にインストールされているフォントのみが表示できます．
・パワーポイントのファイルは，発表番号と発表者の名字の英語表記をファイル名とし（例：A1_osugi），発表会場の受付に提出してください．ファイルはウィルスに感染していないことを確認のうえ，USB メモリ，CD-R で持参してください（MO，DVD，CD-RW は不可）．提出期限は以下のとおりです．

9 月 19 日(金)	午前セッション（A,B,C,D,E）	9:00 まで
	午後セッション（F,G,H,I,J）	12:00 まで

・発表時間は発表 12 分，質疑応答 3 分の合計 15 分です．1 鈴：10 分，2 鈴：12 分，3 鈴：14 分 30 秒

です．時間厳守にご協力ください．
・パソコンの操作は基本的に会場係が行いますが，自分で操作される方は会場係にお伝えください．

《ポスター発表される方へ》

・ポスター発表の会場は，2F 玄関ホール及び 208 号室です．パネルにポスター番号を貼り付けていますので，ご自分の発表番号のパネルにポスターを貼り付けてください．
・ポスターは横 90 cm，縦 180 cm 以内のサイズで作製して下さい．ただし縦のサイズは床からのパネル高さのため，見やすい位置に貼り付けられるポスターサイズをお勧めします（A0 判 841mm×1189mm を推奨します）．
・ポスターの上部に演題・発表者・所属を書いてください．発表者が複数の場合は，代表発表者の名前の前に○印を付けて下さい．
・ポスターの掲示期間は 9 月 18 日(木)～19 日(金)15:30 までの期間とし，ポスターは 18 日(木)の 9:00～12:45 の間に持参者自身で掲示して下さい．
・ポスター発表の発表件数が多いため，コアタイムは 2 部制にいたします．各コアタイムとも 1 時間 30 分です．
・コアタイム 1（発表番号末尾奇数の方）は，9 月 18 日(木)12:45～14:15，コアタイム 2（発表番号末尾偶数の方）は，9 月 18 日(木)14:15～15:45 です．ご自身のコアタイムのスケジュールをご確認され，自分の該当するコアタイムでは，ポスターの前で発表を行って下さい
・ポスターの撤収は 9 月 19 日(金)15:30 から 18:00 の間までに持参者自身で撤収して下さい．掲示時間を過ぎてもポスターを貼り付けたままの場合は，実行委員がポスターを取り外します．取り外したポスターは，大会期間中は実行委員会で保管いたしますが，大会後は処分します．
・ポスターの事前送付は，事故防止のため一切受け付けません．発表当日に各自で持参してください．ポスターを貼り付ける押しピン，セロテープ等は会場に準備しています．指示棒などは各自持参してください．
・PC などの電子機器でデモンストレーションを行っても構いませんが，電源はありません．また大きな音の鳴るデモンストレーションなど，周囲の発表者への迷惑となる行為はご遠慮ください．

《発表賞》

・申請のあった若手研究者，現場技術者または行政担当者の発表から優秀発表賞を選定します．研究の内容，プレゼンテーション技術などを基準に審査します．口頭／ポスターおよび研究／事例の各類別（全 4 類別）について秀でた発表に優秀発表賞（各若干名）を，最も秀でた口頭発表およびポスター発表に最優秀発表賞（各 1 名）を授与します．
・20 日（土）の総会（10:30～11:30）に続いて，優秀発表賞の表彰を行います．

２．公開シンポジウム

＜このシンポジウムは，公益財団法人 河川財団の河川整備基金の助成を受けています．＞

【テーマ】

「地下を流れる水と応用生態工学の接点－健全な水循環の確保に向けて－」

【企画のねらい】

地下を流れる水は,地上や海底に湧き出た場所に特殊な生息場を作り出します.そのような特殊な場に依存する生きものも少なくありません．また，水が地下を移動することで,河川や海域の物質循環にも大きな影響を及ぼすことが知られるようになってきました．一方,人間活動の影響は,水質・土壌汚染,地下浸透による水源涵養機能の低下,水域と地下の健全な水循環の阻害などを通じて,湧水が作り出す生態系に影響を及ぼしています.

これに対し,近年の安定同位体を用いた研究やシミュレーション･可視化技術の発展などがあり,地下を流れる水のマネジメント,健全な水循環のあり方が検討できるようになってきました.そこで,地下を流れる水の流れやその生態学的な機能についての研究事例，知見を共有し,土木技術と生態学の融合をめざす応用生態工学との接点を明らかにするとともに,マクロスケールな水循環とローカルな生態学的な現象をどのように絡めるか等の課題について議論を行い,これらを通じ,今後の研究の進展と自然再生事業等への応用の出発点となることを目指します.

【公開シンポジウム　プログラム(案)】(同時通訳があります)

13:00 趣旨説明　横山 勝英准教授（首都大学東京）

13:10 講演１　「河川の伏流水と地形･植生の相互作用～イタリア･タリアメント川の事例～」
Walter Bertoldi 博士（トレント大学,イタリア）

13:50 講演２　「沿岸地下水湧出による生態系の維持および水産資源への影響評価」
谷口 真人教授（総合地球環境学研究所）

14:30 講演３　「湧水生態系の実態と保全」　森　誠一教授（岐阜経済大学）

15:20 パネルディスカッション
コーディネーター：横山 勝英准教授（首都大学東京）
パネリスト　：Walter Bertoldi 博士（トレント大学,イタリア）
谷口 真人教授（総合地球環境学研究所）
森 誠一教授（岐阜経済大学）
三輪 準二(国土交通省水管理･国土保全局総合水資源管理戦略室長)
石原 成幸（東京都土木技術支援・人材育成センター）
コメンテーター　：中村 太士教授（北海道大学）

16:30 終了予定

３．自由集会　等

８つの自由集会が開催されます．集会には所属学会によらず参加でき，事前申込は不要です．また，「河川砂防技術基準（調査編）をもとにした意見交換会」（会議）が開催されます．会議の傍聴が可能です（発言不可）．

Ａ．「荒瀬ダム撤去過程から見える流域・河川土砂管理の方向性」

・企画：大槻順朗（東京理科大学）
・日時：9 月 18 日(木) 09：30～11：30　　202 教室
・内容：荒瀬ダムでは本邦初の大ダム撤去事業として，現在撤去工事が進行中である．2010 年のダムゲートの常時開放に始まり，2013 年度には堤体に孔（水位低下装置）が敷設され，湛水域では水位が低下し瀬が復活するなど，かつての球磨川の姿を取り戻しつつある．また，ダムから約 20km 下流の河口干潟域では，粗粒化や生物相の変化も確認されてきている．我々の研究グループでは，荒瀬ダム撤去事業を，流域土砂管理実現のために必要不可欠な土砂供給量の変化による物理環境・生物相環境のインパクト・レスポンス関係を見極める絶好の機会と捉え，河口域における土砂輸送による撹乱による効果，環境維持システムの評価までを目指した研究を実施している．本自由集会では，国内外のダム事業や土砂移動疎外緩和事業から本ダム撤去事業の位置づけを行いつつ，本研究グループでの上流から下流，河口海域に渡る影響評価研究を紹介する．それを元に，ダム撤去事業の効果を議論しつつ，今後の流域・河川における土砂管理施策に対する方向性，あるべき姿について議論していきたい．

Ｂ．「応用生態工学会　テキスト刊行委員会」

・企画：萱場祐一（土木研究所，テキスト刊行委員会代表）
・日時：9 月 18 日(木) 09：30～11：30　　203 教室
・内容：応用生態工学会テキスト刊行委員会では，成果の還元，会員へのサービスの向上を目的として，応用生態工学の入門書となるテキストの刊行を企画してきた．昨年度開催した自由集会では，第１巻としてリリース予定の「河道内氾濫原の保全と再生」の内容について紹介を行い，ディスカッションを行った．今年度は，本巻の完成版を提示した上で，会員の皆様から感想を伺うとともに，第２巻以降の内容，編集の進め方等について議論を行いたい．会員の皆様の幅広い参加をお待ちしております．

Ｃ．「ダムによる水生生物個体群の分断と陸封」

・企画：大森浩二（愛媛大学）・井上幹生（愛媛大学）・一柳英隆（水源地センター）
・日時：9 月 18 日(木) 16：00～18：00　　201 教室
・内容：ダムなどの河川横断構造物が水生生物の移動を阻害し，個体群を分断・断片化するのはよく知られた事実である．しかし，その実態は多様である．移動阻害は，ダムの堤体だけによって起こるのではなく，貯水池によって引き起こされているかもしれない．断片化された局所個体群の絶滅は，種や河川の場所によっても確率が異なるだろう．あるいは，陸封された個体群の密度や構造は，そうでない場合と異なる場合もある．この自由集会では，ダムによる水生生物個体群の分断と陸封の実態を，多角的に議論したい．

Ｄ．「【幹事会主催】国土強靭化と自然環境保全」

・企画：応用生態工学会幹事会（萱場祐一・河口洋一・西廣淳），日本生態学会生態系管理専門委員会
・日時：9 月 18 日(木) 16：00～18：00　　202 教室
・内容：昨年 12 月に国土強靭化基本法が施行された．今後，防災・減災を目的とした公共事業が全国各地で急速に展開され，日本の海岸や河川の自然環境に対して強いインパクトをもたらすことが予想される．国土強靭化基本法では，「地域の特性に応じて，自然との共生及び環境との調和に配慮」する方針が掲げられている．この方針は，自然の恵みを持続的に享受できるバランスのとれた国土形成・地域形成にとってきわめて重要である．国土強靭化の目的達成のためには，東北地方太平洋岸などで進められている復興・防災・減災事業において，今からでも可能な環境配慮を実施するとともに，有効な教訓を抽出することが不可欠である．そして，生態系を国民生活に欠くことのできない社会基盤とみなすグリーンインフラストラク

チャーの思想に基づいて，防災・減災機能も含めた生態系サービスを，全ての国民が享受し続けられるよう，地域の自然環境・生態系ネットワークを適正に保全・管理する対策が講じられなければならない．本集会では，国土強靭化をめぐる社会情勢について情報を共有するとともに，国土強靭化と自然環境保全の両立について議論する．

E．「小さな自然再生が中小河川を救う！」

・企画：三橋弘宗（兵庫県立大学）

・日時：9 月 18 日(木) 16：00～18：00　　203 教室

・内容：自由集会「小さな自然再生が中小河川を救う！」は，一昨年，昨年のＥＬＲ大会において開催し，各地の事例やその相違点や課題について整理することができた．参加者や関係者からの反響も大きく，リクエストを受けて現在，事例集の作成を進めている．この事例集を作成する議論の過程において，小規模な取り組みを行う上での共通のコンセンサス部分の整理，特に通常の行政計画として行われる河川整備や多自然川づくりとの関係性や実施の背景となる計画論や実施体制についての課題が大きな論点となった．今回の自由集会では，これまでのストックを活かして，個々の事例の計画論や実施体制，参加型を促進し波及するために必要な事項などに焦点を充てたテーマで開催し，これらの話題をもとに会場参加者との議論を行いたい．

F．「ダム湖における外来魚対策」

・企画：浅見和弘（応用地質株式会社）・大杉奉功（水源地環境センター）・中井克樹（滋賀県立琵琶湖博物館）・谷田一三（大阪府立大学名誉教授）

・日時：9 月 19 日(金) 15：30～18：00　　201 教室

・内容：全国の多くの河川，湖沼（ダム湖を含む）では，オオクチバス *Micropterus salmoides* やブルーギル *Lepomis macrochirus* などの外来魚が著しく増加することにより，在来生態系のバランスが崩れている．両種は外来生物法(平成 16 年 6 月 2 日施行)の定める特定外来生物に指定され，野外への放出，移動，飼育等が禁止されるとともに，自然湖沼やため池などを中心に防除事業が進められている．一方，ダム湖では，河川水辺の国勢調査（ダム湖版）における平成 2 年（1990 年）～平成 16 年（2004 年）の魚類の調査結果によると，94 ダム中 49 ダムでオオクチバスとブルーギル(および同じく特定外来生物に指定されているコクチバス)が確認されている．そのうちオオクチバスの確認例が最も多く 45 ダムで，次いでブルーギルが 33 ダムを数える．

　広大なダム湖を全て干し上げることは運用上困難で，オオクチバスやブルーギルの根絶は不可能に近い．しかし，これらの魚の生態特性や貯水池の運用を利用することで，効率的な調査や防除は可能である．本集会では，ダム湖で実施されてきたオオクチバスとブルーギルを対象とした調査手法や防除の事例を紹介し，水源域の生物多様性保全や水資源管理のために，ダム湖のあるべき姿について意見交換したい．

G．「河川空間を動的に捉える：攪乱による生息場更新と生物群集動態」

・企画：田中規夫（埼玉大学）・竹門康弘（京都大学）・古里栄一（埼玉大学）

・日時：9 月 19 日(金) 15：30～18：00　　202 教室

・内容：応用生態工学において，河川生態系は重要な研究対象である．生息場に関する多くの研究が応用生態工学会で発表されている．近年は，河川生態系のハビタットを動的に捉え，ハビタットの寿命や河床の構造，底層の流れと群集動態の関係に着目した研究も実施されるようになってきている．こうした方法・着眼点は，従来得られた多くの応用生態工学的な知見を更に発展させ，新たな興味深い展開につながる可能性がある．

　河川水中の生態系を理解する場合，ハビタットの面から考えることの重要性は古くから認識されている．しかしながら，河川空間の特性やダイナミズムを考えた場合，生態系から見れば，「器」としてのハビタットそのものが動的であることから，生態系も動的なものとして理解する必要があるという立場から考えたい．河川空間の形態は，そこで形成される流れに加え，場合によっては砂の動きを通じて，ハビタットとして生態系構成生物に作用している．単に河床空間や河床材料の形を見るだけではなく，それらの「形（河床構造学)」がどういった「ながれ場（生態水理学)」との相互作用のもとで変動し（ハビタットの寿命)，生態系の

「群集形成（(水理) 生態学) や動態」が生じるかと言う観点が必要ではないだろうか. Frissell らの階層構造概念は撹乱後の回復時間と関係付けられている事からも自明であるように，河川生態系は物理的撹乱の影響のもとで存在している．群集構成の時間的な変動についても，生物個体群どうしの様々な相互作用により生じる「遷移の進行」だけでなく，物理的撹乱による「遷移の退行」も意識する必要がある．

こうした観点から，本集会ではまず「動的」に河川生態系を捉える方向性やフレームについて，生態学や水理学的な観点から示すとともに，関連した個別事例等について話題提供を行う．それらに基づき，総合討論では会場との意見交換により，「生息場」，「動的」，「撹乱」，「今後の応用生態工学」等について議論を行いたい．

なお，本集会は，土木学会基礎水理部会の生態水理分科会の活動の一環として行われるとともに，昨年度自由集会として実施された「河床の見方　―水工学と生態学，河川中上流域を中心として―」の発展的集会として企画するものである．

H.「震災復興に応用生態工学はどのような貢献ができるのか 2：復興の現状と課題」

・企画：久米　学（岐阜経済大学）・境　優（東京農工大学）・向井康夫（東北大学）

・日時：9 月 19 日(金) 15：30～17：30　　103 教室

・内容：2011 年 3 月 11 日，東日本大震災が発生し，東北地方沿岸に甚大なる被害をもたらした．現在では，マスメディアでの報道の頻度は減少しており，復興が進んでいるものと思われがちである．しかしながら，現地に赴くと復興の道半ばであることを実感する．今後の復興に向けたまちづくりの方向性次第では，生物環境を含む景観・風景は，人為的改変により甚大な影響を受ける可能性があるだろう．例えば，「巨大防潮堤の建設」は各地共通の議論の対象となるだろう．その際に，応用生態工学という学問が，今後も起こり得る自然災害による被害軽減も視野に入れつつ，震災後の復興事業にどのようなスタンスをもって立脚し得るのか，が問われるのではなかろうか．そこで本集会では，まず，福島県，宮城県，岩手県における震災復興の現状について話題提供を行い，それを受けて，　パネリストをお迎えして，「復興事業が生態系に与える影響」をテーマに応用生態工学が取り得るスタンスについて議論を行う．

I．会議「河川砂防技術基準（調査編）をもとにした意見交換会」（傍聴可）

・意見交換会メンバー

国土技術政策総合研究所：福濱水環境研究官，中村圭吾主任研究官

土木学会環境水理部会　：京都大学　角哲也 教授，芝浦工科大学　宮本仁志 教授，山口大学　赤松良久 准教授

応用生態工学会　　：徳島大学　河口洋一 准教授，名古屋大学　田代喬 准教授，東邦大学　西廣淳 准教授，水源地環境センター中村敏一

・日時：9 月 19 日(金) 15：30～17：30　　203 教室

・内容：国土交通省においては，平成 24 年 6 月に河川砂防技術基準（調査編）（以下，河砂基準）が改定されました．その総論には「新たな調査方法等の採用に当たっては，国土技術政策総合研究所等による関連情報の収集・調査等によるほか，学識者や関係者等の意見を聞くことにより最新の調査方法，技術的知見，課題等を把握する作業を定期的に行い，調査編の内容を見直すこと」としており，産官学の連携を通じた河川管理技術の向上が期待されています．

この度，河砂基準の環境分野の記載が，最新の学術的・技術的水準および現場実務での活用実態・実績を踏まえたうえで，必要かつ十分なレベルで適宜改定されるよう学識者や関係者等と継続的に意見交換を行う仕組みを構築することを目指して第 1 回意見交換会が開催されます．

※傍聴希望者は傍聴可能です（会場の人数制約有，先着順）．ただし，傍聴者のご発言は出来ません．

４．エクスカーション

【企画のねらい】

多摩川は首都圏を流下し東京湾に注ぐ河川で，都市における貴重な自然環境，レクレーションの場となっており，流域の水流実態の解明や保全・再生の取り組みが行われています．また，東京湾に残る干潟は，生物の生息場や干満による物質循環機能を有し，豊富な資源により地域の繁栄にも寄与しており，干潟再生や地域活性のための活用の取り組みも行われています．

多摩川コースでは，多摩川中流域を訪ね，都市域の河川における水循環と自然環境の保全・再生について学びます．小櫃川河口コースでは，自然の干潟が残り，干潟を活用した地域活性の取り組みが行われている小櫃川河口干潟を訪ね，干潟再生の目的と構造を学びます．

【コース・日程(予定)】

①多摩川コース

9 月 21 日(日)　9:00　JR 青梅線「羽村駅」　集合・出発
羽村取水堰・玉川上水
生態系保持空間（永田地区）礫河原再生等
昼食
雨水浸透施設・湧水導水箇所等
狛江水辺の楽校，狛江水害決壊の碑，二ヶ領宿河原堰
15:00　JR 南武線・小田急線「登戸駅」　解散

※参加申し込みをされた方には，集合や移動，注意事項等の詳細を改めてお知らせします．

②小櫃川コース・③小櫃川日帰りコース

9 月 20 日(土)16:30　公開シンポジウム終了
19:00　木更津市金田海岸「民宿与兵衛」集合，夕食，交流会，宿泊
講演会(干潟を活用した地域活性　講師:金田の浜活性化協議会　金萬智男)
9 月 21 日(日) 8:30　民宿　出発（日帰りコースは民宿集合）
小櫃川河口干潟観察
民宿　着　昼食
14:00　講演会（小櫃川河口干潟の生態系特性と東京湾干潟再生事業
講師:東邦大学名誉教授　風呂田利夫)
15:00　「木更津金田バスターミナル」又は JR 内房線「巌根駅」　解散

※20 日(土)の公開シンポジウム終了後に会場から移動の場合，京王線「南大沢駅」→「東京駅」（約 1 時間),「東京駅八重洲口」より高速バス→「木更津金田バスセンター」(5～10 分間隔，所要時間約 40 分）が便利です．
「木更津金田バスターミナル」又は JR 内房線「巌根駅」までは民宿の送迎があります．
※21 日(日)の日帰りコースの方は,各自で民宿与兵衛(木更津市中島 3846)まで集合ください．参加人数によってはバスターミナル又は駅からの送迎を検討します．
※参加申し込みをされた方には，集合や移動，注意事項等の詳細を改めてお知らせします．

５．懇親会

懇親会は，第 2 日目（9 月 19 日（金））の口頭発表，自由集会の後，18:30 より別棟の国際交流会館で行います．また毎回好評の「全国からうまいものを持ち寄る普及連携委員会」コーナーも充実しておりますので，ぜひご参加ください．

【日時】

平成 26 年 9 月 19 日（金）　18:30 から

【会場】

首都大学東京　南大沢キャンパス　国際交流会館内　フランス料理　ルヴェ　ソン　ヴェール南大沢
住所：〒192-0397　東京都八王子市南大沢 1-1　首都大学東京　国際交流会館内
電話：042-677-3304

６．参加申し込み方法

【申し込み先】

応用生態工学会ホームページの「参加申込フォーム」もしくは参加申込用紙の FAX 送信によりお申込みください．申込期限は 8 月 31 日（日），参加費の振込期限は 9 月 5 日（金）です．

参加申込フォーム: http://ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=annual_con2014

FAX によるお申込は，『参加申込書』にご記入の上，下記までお申込下さい．

FAX 宛先：　03-5216-8520

【参加費】

〔１〕研究発表会

会員：6,000 円，非会員：10,000 円，学生(会員･非会員)3,000 円．

※参加費には講演要旨集が含まれております．講演要旨集のみ希望の方は，3,000 円で販売しております．

※大会期間中、大学構内にある学食は営業しております．また「南大沢」駅前にも飲食店があります．別途 1,000 円でお弁当が用意できます．参加申込みと同時にお申し込みください．

〔２〕エクスカーション

①多摩川コース　会員：3,000 円，非会員：4,500 円，学生(会員･非会員)：2,000 円（昼食代含む）．

②小櫃川コース　会員：2,000 円，非会員：3,000 円，学生(会員･非会員)：1,000 円（昼食代含む）．
※別途宿泊費（1 泊 2 食付）6,500 円+酒代を現地にて各自でお支払いください．

③小櫃川日帰りコース　無料（昼食代は現地にて各自でお支払いください．送迎等により別途費用が発生する場合があります．）

〔３〕懇親会

一律：5,000 円（当日，会場で徴収します）．

【参加料振込先】

〔１〕郵便振替口座

口座番号：00140－7－404275
口座名称：応用生態工学会

〔２〕銀行振込口座

銀行名：東京三菱銀行麹町中央支店
口座番号：(普通)1302920
〔口座名称〕応用生態工学会（オウヨウセイタイコウガクカイ）

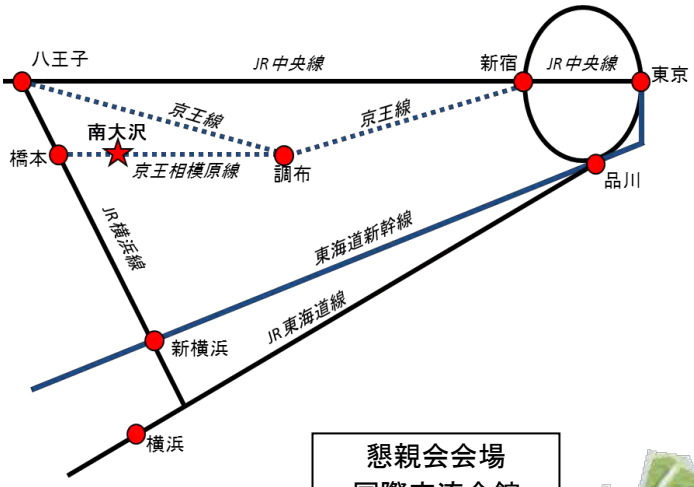
７．お問い合わせ先

応用生態工学会事務局
〒102-0083 東京都千代田区麹町 4-7-5 麹町ロイヤルビル 405 号室
TEL：.03-5216-8401　FAX：03-5216-8520
E-mail：tokyo_18th@ecesj.com

― 会場へのアクセス・会場案内 ―

【会　場】

首都大学東京　南大沢キャンパス　12 号館
（東京都八王子市南大沢 1-1）
電話：042-677-1111（代表）
URL：http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/map.html

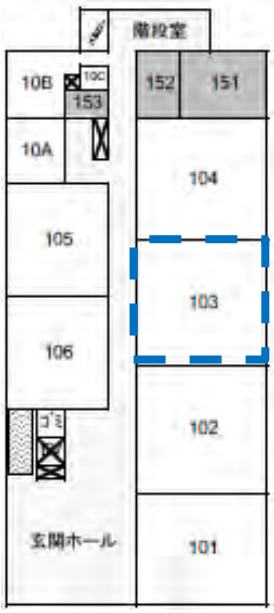


【会場までの主な交通機関】

交通：京王電鉄相模原線「**南大沢**」駅下車
（特急以下すべての列車が停車します）

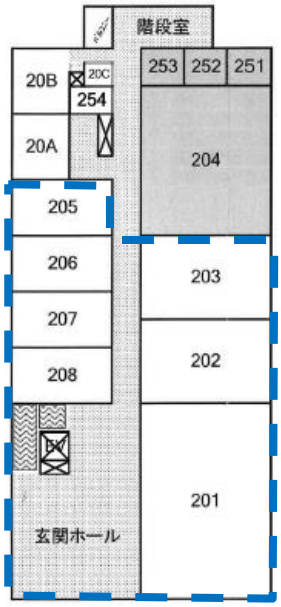
■「新宿」から約 30～40 分　（京王線経由）
■「東京」から約 1 時間
（JR 中央線,「新宿」乗換え,京王線経由）
■「新横浜」から約 55 分
（JR 横浜線,「橋本」乗換え,京王線経由）
■「南大沢」駅から大学まで徒歩 5 分
（会場の 12 号館までは駅から徒歩 15 分程度）

【首都大学東京　南大沢キャンパス　案内図】



受付は
1F 玄関ホールです。

【12 号館 1 階会場　配置図】



ポスターの掲示は
2F 玄関ホールと
208 教室です。

【12 号館 2 階会場　配置図】

プログラム・会場対応表

9月18日（木）		201（机固定：200人程度）	202（80人程度）	203（80人程度）	103（机固定：120人程度）	ロビー	208(30人程度)	207(30人程度)	206	205
9:30	11:30	－	自由集会 A. 荒瀬ダム撤去	自由集会 B. テキスト	－	ポスター準備		休憩室	－	事務局詰所
11:30	12:45	昼食時間		普及・連携委員会	昼食時間				会誌編集委員会	
12:45	14:15	－	－	－	－	ポスターコアタイムA			国際交流委員会	
14:15	15:45	－	－	－	－	ポスターコアタイムB			会議15:30～17:30	
16:00	18:00	自由集会 C. ダム分断	自由集会 D. 国土強靱化	自由集会 E. 自然再生	－	ポスター掲示				

9月19日（金）		201（机固定：200人程度）	202（80人程度）	203（80人程度）	103（机固定：120人程度）	ロビー	208(30人程度)	207(30人程度)	206	205
9:30	12:00	口頭発表 A.河床環境評価 6	口頭発表 C.流域特性 2	口頭発表 E.河川敷植生 9	－	ポスター掲示		休憩室	－	事務局詰所
		口頭発表 B.河口域・干潟 3	口頭発表 D.ダム下流 5		－				－	
					－				－	
12:00	13:00	昼食時間							将来構想	
13:00	15:00	口頭発表 F.水質管理 7	口頭発表 G.外来種 2	口頭発表 I.水生植物 3	－				－	
			H.湿地・氾濫原 4	J.魚類生息環境 4	－				－	
15:00	15:30	休憩時間							－	
15:30	17:30	自由集会 F. 外来魚	自由集会 G. 河川空間	会議 I. 河川砂防技術基準	自由集会 H. 震災復興	ポスター撤去			－	
17:30	18:00				－				－	
18:00	18:30	休憩・移動時間							－	
18:30	20:30	懇親会（会場：国際交流会館）							－	

9月20日（土）		201（机固定：200人程度）	202（80人程度）	203（80人程度）	103（机固定：120人程度）	ロビー	208(30人程度)	207(30人程度)	206	205
9:00	10:30						幹事会・理事会		講師控室	事務局詰所
10:30	11:30	第18回総会								
11:30	12:00	発表賞表彰								
11:30	13:00	昼食時間								
13:00	16:30	公開シンポジウム「地下を流れる水と応用生態工学の接点」								

9月21日（日）		エクスカーション
9:00	15:00	①多摩川コース
9/20～	～9/21	②小櫃川宿泊コース
9:00	15:00	③小櫃川日帰りコース

ー　研究発表会プログラム　ー

【研究発表会・一般講演内容(口頭発表)】

※発表者、タイトルの後の「研」は研究報告，「事」は事例報告

口頭発表　9月19日(金)―2日目―　9:30～14:45　[　201会場　]

セッションA　河床環境評価

9:30　A-1.　**実河川に設置した簡易水路での掃流力増加実験における水生昆虫と細砂分の移動現象:「研」**

古里栄一※(埼玉大学大学院理工学研究科/埼玉大学研究機構レジリエント社会研究センター)・坂田良介(埼玉大学大学院理工学研究科)・田中規夫(埼玉大学大学院理工学研究科/埼玉大学研究機構レジリエント社会研究センター)

9:45　A-2.　**早瀬と平瀬における付着藻類の平面分布と流れ場との関係に関する現地調査:「研」**

坂田良介※(埼玉大学大学院理工学研究科)・古里栄一(埼玉大学大学院理工学研究科/埼玉大学研究機構レジリエント社会研究センター)・田中規夫(同)

10:00　A-3.　**移動床と固定床が混在する場における動的平衡河床の不可逆性と河床変動特性:「研」**

久加朋子※(北海道大学大学院 工学研究院)・
竹林洋史(京都大学防災研究所)・藤田正治(同)

10:15　A-4.　**江戸期に行われた河川改修による水環境変化と古生態分析の手法:「研」**

芝崎美世子(大阪市立大学大学院理学研究科)

10:30　A-5.　**河床の礫環境とニホンザリガニ(*Cambaroides japonicus*)の個体サイズとの関係:「研」**

布川雅典※(北海道大学大学院)・鈴木雅人(和光技研株式会社)・本間英敏(同)・中原修(同)

10:45　A-6.　**夏季に造成したカバーがニホンザリガニ(*Cambaroides japonicus*)の個体数と個体サイズに与える影響:源流域における小さな自然再生:「事」**

鈴木雅人※(和光技研株式会社)・布川雅典(北海道大学大学院)・本間英敏(和光技研株式会社)・中原修(同)

セッションB　河口域・干潟

11:00　B-7.　**人工干潟の底質による底生生物の「飲み込み」現象:「研」**

東和之※(徳島大学院 先端技術科学教育部)・大田直友(阿南高専 創造技術工学科)・中河哲郎(同 専攻科)・橋本 温(県立広島大学 生命環境学部)・上月 康則(徳島大学院 ソシオテクノサイエンス研究部)

11:15　B-8.　**フィリピンを対象にしたマングローブ植林の功罪についての研究**

李妍※(埼玉大学)・淺枝隆(同)

11:30　B-9.　**山口県島田川河口域における砂州の発達過程と海浜植物群落の関係性**

二神良太※(広島工業大学大学院工学系研究科)・岡浩平(広島工業大学環境学部地球環境学科)

11:45～13:00　**― 休憩 ―**

セッションF　水質管理

13:00　F-10. **ダム貯水池における底層嫌気化の発生頻度と要因分析:「研」**
今本博臣※((独)水資源機構)・太田志津子(同)・高玉はるか(同)・久納 誠(同)

13:15　F-11. **霞ヶ浦の懸濁物に含まれるリン化合物の動態について:「研」**
篠原隆一郎※(独立行政法人 国立環境研究所　地域環境研究センター)・
今井章雄(同)・, 冨岡典子(同)・高津文人(同)・小松一弘 (同)・
佐藤貴之(同)・佐野友春(同 環境計測研究センター)・
三浦真吾(同 地域環境研究センター)・霜鳥孝一(同)

13:30　F-12. **栄養塩濃度がシアノバクテリアのカビ臭生産能に与える影響:「研」**
志賀浪優※(埼玉大学工学部理工学研究科　環境科学・社会基盤部門)・吉田晃一(同)・淺枝隆(同)

13:45　F-13. **干し上げによるシアノバクテリアのかび臭発生機構への影響:「研」**
吉田賢広※(埼玉大学工学部理工学研究科　環境科学・社会基盤部門)・
吉田晃一(同)・淺枝隆(同)

14:00　F-14. **CODを指標としたヨシとアサザによる水質浄化機能の定量化**
山室真澄※(東大新領域)・上原達弥(同)

14:15　F-15. **Effect of Fluctuating Light and Hydrostatic Pressure on Fresh Water Cyanobacteria: *Pseudanabaena galeata sp.* :「Research report」**
H. D. L. Abeynayaka※(Department of Environmental Science and Technology, Saitama University)・T. Asaeda(ditto)

14:30　F-16. **Investigate the effect of UV radiation on 2-methylisoborneol producing cyanobacterium (*Pseudanabaena galeata*):「Research report」**
Thabrew Kaluhath Samadhi Hasangika※(Department of Environmental Science and Technology, Saitama university)・
Asaeda Takashi.(ditto)

口頭発表　9月19日（金）―2日目―　9:30～14:30　［ 202会場 ］

セッションC　流域特性

9:30　C-17.　**流域規模の長期観測にもとづく揖保川水系における河川水温の変動特性：「研」**
宮本 仁志※（芝浦工業大学）・松井 拓也(前 神戸大学)

9:45　C-18.　**流域における物質・エネルギー輸送場の3次元数理モデリングと生態系分野への応用可能性：「研」**
森康二※（地圏環境テクノロジー）・田原康博（同）・多田和広（同）・
登坂博行（東京大学）

セッションD　ダム下流

10:00　D-19.　**河川ネットワーク上において水資源利用が流況の空間分布へ与える影響：「研」**
梁　政寛※（東京工業大学 土木工学専攻 ）・岩崎　雄一（同）・吉村　千洋（同）・Saavedra Oliver（同）

10:15　D-20.　**矢作川におけるカワヒバリガイの分布からの浮遊幼生発生源の推定：「研」**
内田 臣一（愛知工大 土木）

10:30　D-21.　**流水型ダム上下流における土砂の移動特性に関する研究：「研」**
鈴木荘司※（(株)建設技術研究所）・関根　秀明（同）・
白井　明夫（一般社団法人 水源地環境センター）

10:45　D-22.　**ダムの維持放流の流量変化と減水区間の河川環境に関する基礎的研究：「研」**
長山昭夫※（群馬工業高等専門学校環境都市工学科）・宮里直樹（同）・
堀尾明宏（同）

11:00　D-23.　**河床の粒度組成の変化が魚類の生息に及ぼす影響の評価方法の考え方：「研」**
小野田幸生※（（独）土木研究所 自然共生研究センター）・高木哲也（（独）土木研究所 自然共生研究センター/応用地質株式会社）・
宮川幸雄（（独）土木研究所 自然共生研究センター）・
萱場祐一（（独）土木研究所 河川生態チーム）

11:15～13:00　**― 休憩 ―**

セッションG　外来種

13:00　G-24.　**海洋島における外来植食ほ乳類駆除後の生態系変化：「研」**
可知直毅※（首都大院・理工・生命）・畑憲治（同）・川上和人（（独）森林総合研）・
平舘俊太郎（(独)農業環境技術研）・大澤剛士（同）・吉田勝彦（(独)国立環境研）

13:15　G-25.　**高麗川における外来淡水エビの侵入：「研」**
石黒直哉※（城西大学理学部化学科）・木村祐哉（同）・日和佳政（越前市産業環境部農政課）

セッションH　湿地・氾濫原

13:30　H-26.　**河道タイプによって異なる氾濫原依存種イシガイ類の生息制限要因の比較：「研」**
永山滋也※（土木研究所自然共生研究センター）・原田守啓（同）・
萱場祐一（同　河川生態チーム）

13:45　H-27.　**湿地ネットワークの構造と空間スケールがイバラトミヨ個体群に与える影響：個体数と遺伝的多様性間での比較検証：「研」**
石山信雄※（北大農学院）・小泉逸郎（北大環境科学院）・油田照秋（同）・
中村太士（北大農学院）

14:00　H-28.　**森林・農地景観における河川水生昆虫の個体群維持機構ートビケラの遺伝的構造が解き明かすソースシンクの関係性：「研」**
末吉正尚※（北大農学院）・東城幸治（信州大理）・中村太士（北大農学院）

14:15　H-29.　**天王川及び吉野瀬川水系を中心とした福井県越前市に生息するドジョウ（*Misgurnus anguillicaudatus*）の遺伝的特性：「研」**
日和佳政※（越前市産業環境部農政課 コウノトリ共生推進グループ）・
西瑞穂（城西大学　理学部化学科 環境生命化学研究室）・
藤長裕平（越前市産業環境部農政課 コウノトリ共生推進グループ）・石黒 直哉（城西大学　理学部化学科 環境生命化学研究室）

口頭発表　9月19日(金)　－2日目－　9:30～15:00　[203会場]		
セッションE　河川敷植生		
9:30	E-30.	**札内川人工放流における派川復元手法の検討 :「事」** 渡邊康玄※ (北見工業大学社会環境工学科)・ 武田 淳史 (北海道開発局帯広開発建設部)・ 川岸 秀敏(北海道開発局河川計画課)・ 住友慶三(株式会社ドーコン水工事業本部)
9:45	E-31.	**Effects of Arbuscular mycorrhizal fungi on growth and chlorophyll content of *Pharagmites japonica* growing on river bank soil :「Research Report」** Animesh Sarkar (Department of Environmental Science, Saitama University,Japan/Department of Food Engineering and Tea Technology,Shahjalal University of Science & Technology, Bangladesh)・ Takashi Asaeda※ (Department of Environmental Science, Saitama University,Japan)・ Qingyue Wang(ditto)・Md H. Rashid(ditto)
10:00	E-32.	**Seasonal variations of carbohydrates in *Pueraria montana* related to growth and phenology :「Research report」** Md Harun Rashid※ (Department of Environmental Science, Saitama University,Japan)・ Takashi Asaeda (ditto)
10:15	E-33.	**礫河原の樹林化は砂礫性昆虫を介した陸域と水域のつながりを変化させるか？ :「研」** 植村　郁彦※ (北海道大学大学院 環境科学院)・根岸　淳二郎(同)・ 照井　慧(同 農学研究院)・中村太士(同)
10:30	E-34.	**揖斐川高水敷掘削後の微地形形成とヤナギ類の定着　:「研」** 原田守啓※ (独)土木研究所自然共生研究センター)・永山滋也 (同)・大石哲也(同)・萱場 祐一(同 水環境研究グループ河川生態チ-ム)
10:45	E-35.	**河川敷切下げ高さの違いが樹林化に及ぼす影響とその対策　:「研」** 大石哲也※ (独)土木研究所水環境研究グループ自然共生研究センター)・ 永山滋也 (同)・萱場祐一(同 水環境研究グループ河川生態チーム)
11:00	E-36.	**ハリエンジュとその樹種転換候補在来樹種における葉リターの分解と腐食性動物による利用―陸域と水域における比較― :「研」** 加賀谷隆※ (東大院・農学生命・森林動物)・津田大輝 (同)・小林飛輝(同)
11:15	E-37.	**河道内樹木の萌芽再生の抑制を図る伐採後の根株処理技術の提案:「事」** 小澤宏二※(いであ株式会社)・平野亮 (同)・松田明浩(同)・丹羽崇哲(同)
11:30	E-38.	**河川植生が担う昆虫の種多様性保持および生態系ネットワーク効果の検証 :「研」** 奥寺繁(農研機構 東北農業研究センター　)
11:45～13:00		**― 休憩 ―**

セッションI　水生植物

13:00　I-39.　**水生植物フェノロジーを用いた阿寒湖のサイドスキャンソナー画像の分類:「研」**
山田浩之※(北海道大学農学研究院)・横山諒((株)ドーコン)・
海津裕(東京大学大学院農学生命科学研究科)・
若菜勇 (阿寒湖畔エコミュージアムセンターマリモ研究室)

13:15　I-40.　**Growth and stress response of submersed macrophyte ; *Myriophyllum spicatum* to turbulence and main flow:「Research report」**
Keerthi Sri Senarathna Atapaththu※ (Department of Environmental Science and Technology, Saitama University)・Takashi Asaeda (ditto)

13:30　I-41.　**Effects of reduced condition on growth and photosynthetic parameters of aquatic macrophyte *Myromhyllum spicatum*:「Research report」**
Mahfuza Parveen※(Graduate School of Science and Engineering, Saitama University, Japan)・Takashi Asaeda (Department of Environmental Science, Saitama University.Japan)

セッションJ　魚類生息環境

13:45　J-42.　**粗朶を利用した魚の隠れ家の機能検証:「研」**
佐藤高※(長岡技科大生物)・野上泰宏(新潟県内水試)・
前雄介(新潟県農林水産部水産課)・堀田尚宏(新潟県水産海洋研究所)・
吉田稔(新潟県内水試)・山本麻希(長岡技科大 生物)

14:00　J-43.　**沖縄県二級河川奥川の自然再生に関する生物環境からの効果評価:「事」**
宮良工※(沖縄県環境科学センター)・赤松 良久(山口大学大学院)・
島谷 幸弘(九州大学大学院)

14:15　J-44.　**利根川河口堰での誘導放流操作による効果について:「事」**
大村朋広((独)水資源機構 利根川下流総合管理所利根川河口堰管理所)・
椎名教之(同)

14:30　J-45.　**宮中取水ダムにおける魚道施設の設計施工と改築前後のモニタリング:「事」**
澤村里志※(東日本旅客鉄道(株) 信濃川発電所業務改善推進部 河川環境グループ)・森山泰明(同)・枡本　拓(同 河川環境調査グループ)・空閑 徹也(同)・
竹内 洋介(同)

【研究発表会・一般講演内容(ポスター発表)】

※発表者、タイトルの後の「研」は研究報告，「事」は事例報告

ポスター発表　9月18日（木）―1日目―　12:45～15:15　［会場：2F玄関ホール］

12:45～14:15	コアタイム１（セッション末尾奇数番）・・・・・・2F玄関ホール
14:15～15:45	コアタイム２（セッション末尾偶数番）・・・・・・2F玄関ホール

セッションA　流域特性

PA-1. **「大規模流量データ解析による河川攪乱レジーム特性の広域的把握」:「研」**
吉村研人※（愛媛大学理工学研究科）・三宅洋（同）・中西哲（独立行政法人土木研究所）

PA-2. **「放射性同位体トレーサを用いた農地小河川の河床材料の生産源推定」:「研」**
水垣　滋※（（独）土木研究所寒地土木研究所）・渡辺のぞみ（北海道大学大学院環境科学院）・根岸淳二郎（同　地球環境科学研究院）

PA-3. **「マルチスケール系を対象とした物質・熱の輸送挙動を解析する汎用シミュレータGETFLOWS」:「研」**
田原康博※（地圏環境テクノロジー）・森康二（同）・多田和広（同）・柿澤　展子（同）・小林　嵩丸（同）・櫛渕　みちる（同）・登坂博行（東京大学）

PA-4. **「一次元河川生態系モデルの開発とその適用」:「研」**
赤松良久（山口大学大学院理工学研究科）・高村紀彰（中電技術コンサルタント（株））・上鶴翔悟※（山口大学大学院理工学研究科）・永野博之（八千代エンジニアリング（株））

PA-5. **「分布型流出・水温モデルを用いた水生昆虫の遺伝的多様性の推定」:「研」**
糠澤桂※（東北大学大学院工学研究科）・風間聡（同）・渡辺幸三（愛媛大学大学院理工学研究科）

セッションB　流域・地質

PB-6. **「山地の地形・地質が渓流の河道特性に及ぼす影響」:「研」**
山本淳史※（東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻）・原田大輔（同）・知花武佳（同）

PB-7. **「流域地質が底生動物群集に与える影響　ー菊池川水系渓流域を対象にー」:「研」**
池上 龍※（熊本大学大学院自然科学研究科）・皆川 朋子（同）・黒木 啓考（九州電力（株） 技術本部水力開発事務所）・大山璃久（九州大学大学院 ）・佐藤辰郎（同）

PB-8. **「地質の違いは渓流生物にどのような違いをもらたすか？」:「研」**
皆川朋子※（熊本大学工学部）・佐藤辰郎（九州大学大学院）・一柳英隆（熊本大学大学院）・笠原玉青（九州大学大大学院）・天本昌吾（熊本大学大学院）

PB-9. **「九州の河川を対象とした流量レジーム特性に関する研究」:「事」**
厳島怜※（九州大学　持続可能な社会のための決断科学センター）・島谷幸宏（九州大学工学研究院環境社会部門）

セッションC　湧水

PC-10. **「京都府鴨川におけるアユ（*Plecoglossus altivelis*）の分布と高水温環境下での湧水溜まりの利用」:「研」**
中川光※（神戸大学大学院理学研究科）・三品達平（京都大学大学院理学研究科）・竹門 康弘（京都大学防災研究所）

PC-11. **「地下水の生態系維持機能と防災機能を示す試作図について」:「事」**
小川豪司※（アジア航測（株））・宮原智哉（同）・渡部元（国土交通省国土政策局国土情報課）・山本洋一（(前)国土交通省国土政策局国土情報課）・安喰靖（同）・山本洋一（国土交通省国土地理院企画部）

セッションD　物質循環

PD-12. **「魚類標本の安定同位体比を指標とした青森県小河川における環境変遷の推定」:「研」**

田村 和也※(弘前大学大学院農学生命科学研究科)・
東 信行(弘前大学農学生命科学部)

PD-13. **「山地森林流域におけるイワナへの放射性セシウム蓄積量評価:摂食- 代謝解析」:「研」**

五味高志※(東京農工大学)・境優(同)・岡田健吾(同)・岩本愛夢(同)・根岸淳二郎(北海道大学大学院地球環境科学研究院)・布川雅典(同)

セッションE　島嶼

PE-14. **「外来樹木の駆除は乾燥に伴う土壌含水量の減少速度を小さくする」:「研」**

畑憲治※(首都大学東京大学院理工学研究科)・川上和人((独)森林総合研究所)・可知直毅(首都大学東京大学院理工学研究科)

PE-15. **「小笠原産ボチョウジ属植物の繁殖生態に注目した域内保全手法の開発に向けて」:「研」**

須貝杏子※(琉球大学・熱帯生物圏研究センター・西表研究施設)・渡邊謙太(沖縄工業高等専門学校)・加藤英寿(首都大学東京・理工学研究科・牧野標本館)・菅原敬(同)

セッションF　ダム・ダム下流

PF-16. **「矢作川の底生動物群衆の遷移における造網型トビケラ類各種の位置付け」:「研」**

岡田和也※(愛知工業大学工学研究科建設システム工学)・内田臣一(同　都市環境学科)

PF-17. **「矢作川水系におけるカワゲラ類の分布と河川環境」:「研」**

川﨑 嵩之※(愛知工業大学大学院 工学研究科 建設システム工学専攻)・内田 臣一(同　都市環境学科)

PF-18. **「白川ダムにおける藍藻類の生態的特徴を踏まえた異臭味現象の解明と対策検討」:「事」**

富田邦裕※((株)建設環境研究所)・本間隆満(同)・佐藤隆善(同)・田中努(国土交通省東北地方整備局)・髙橋正志(同)

PF-19. **「河川分断化が底生動物3種の遺伝的分化へ及ぼす影響評価」:「研」**

山崎久美子※(愛媛大学大学院理工学研究科)・不破直人(愛媛大学)・三宅洋(愛媛大学大学院理工学研究科)・渡辺幸三(同)

セッションG　生息環境評価

PG-20. **「中高度航空写真とSfMを用いた河川ハビタットの把握手法に関する研究」:「研」**

伊豫岡宏樹※（福岡大学）・浜田晃規（同）・山﨑惟義（同）・渡辺亮一(同)

PG-21. **「河床材料の粒径が造巣性トビケラの成長や行動に与える影響」:「研」**

赤尾大樹※（近畿大学農学部）・澤畠拓夫（同）・河内香織（同）

PG-22. **「大阪湾と淀川の環境要因から淀川大堰のアユ遡上数を予測する試み」:「研」**

浦部真治※（京都大学大学院工学研究科）・角哲也（同　防災研究所）・竹門康弘（同）

PG-23. **「天竜川の副流路がアユの産卵床に果たす役割と置き土の効果予測」:「研」**

泉公祐※（京都大学大学院工学研究科）・角哲也（同　防災研究所）・竹門康弘（同）・兵藤誠（いであ(株)）

PG-24. **「RIVPACS方式を用いた河川生態系の典型性評価と駆動要因の解明：魚類群集を対象として」:「研」**

山本逸生※（北海道大学農学院森林生態系管理学）・赤坂卓美（帯広畜産大学保全生態学）・石山信雄（北海道大学農学院森林生態系管理学）・中村太士（同）

PG-25. **「河床材料と河床形態によるシロザケ産卵環境の推定手法」:「研」**

矢野雅昭※（土木研究所 寒地土木研究所）・渡邊康玄（北見工業大学社会環境工学科）・渡邉和好（土木研究所寒地土木研究所）・平井康幸(同)

PG-26. **「境川におけるタナゴ生息モデルの構築と改修案の検討」:「研」**

天本昌吾※（熊本大学大学院自然科学研究科）・桐原謙介（同 工学部社会環境工学科）・皆川朋子（同　大学院自然科学研究科）

PG-27. **「礫スケールにおけるアユの摂食様式に関する研究」:「研」**

高木哲也※（（独）土木研究所 自然共生研究センター、応用地質（株））・小野田幸生（（独）土木研究所自然共生研究センター）・森照貴（東京大学 総合文化研究科 広域システム科学系）・萱場祐一（（独）土木研究所 河川生態チーム）

PG-28. **「河川生息場評価のための生態環境多様性指標の検討」:「研」**

野口智弘※（山口大学大学院）・関根雅彦（同）・伊藤浩文（同）・田部崇博(同)・岡室直樹（長久手市）・神野有生（山口大学大学院）・山本浩一(同)

PG-29. **「過去60年での吉野川の河道変遷とアユの産卵場との関係」:「研」**

寺井一弘※(徳島大学大学院)・河口洋一(同)・武藤裕則(同)・野村一至(同)

PG-30. **「森林流域における攪乱のモザイク性と水系ネットワーク構造がミネトワダカワゲラ個体群の分布に与える影響の検討」:「研」**

大平充※(東京農工大学大学院農学府)・渡邉祐介(玉野総合コンサルタント(株))・境優(東京農工大学大学院農学府)・五味高志(同)

セッションH　小水力発電

PH-31. **「流込み式水力発電が山地河川の生態系に及ぼす影響（1）：夏季非出水期の堰堤下流における代謝構造の変化と付着藻類自濁作用の発現」：「事」**

田代　喬※（名古屋大学減災連携研究センター）・片岡輝之（八千代エンジニヤリング）・スクカ・イェットミル（Mega Wat ShPK Company, Arbania）・辻本哲郎（名古屋大学大学院工学研究科）

PH-32. **「流込み式水力発電が山地河川の生態系に及ぼす影響（2）：冬季非出水期の減水区間における代謝構造変質とその流下方向変化」：「事」**

片岡輝之※（八千代エンジニヤリング）・田代　喬※（名古屋大学減災連携研究センター）・スクカ・イェットミル（Mega Wat ShPK Company, Arbania）・辻本哲郎（名古屋大学大学院工学研究科）

PH-33. **「流込み式水力発電が山地河川の生態系に及ぼす影響（3）：秋季から冬季にかけての生息魚類群集の応答」：「事」**

松谷隆祐※（名古屋大学大学院工学研究科）・田代　喬（同　減災連携研究センター）・辻本哲郎（同　大学院工学研究科）

PH-34. **「小水力発電による減水がカワガラスの採餌行動に与える影響について一熊本県緑川を事例として一」：「事」**

大山璃久※(九州大学大学院)・一柳英隆(同 持続可能な社会のための決断科学センター)・佐藤辰郎(同)・島谷幸宏(同)

セッションI　市民連携

PI-35. **「市民による河川モニタリング活動の実態調査と更なる推進に向けた考察」：「研」**

和田彰※（（株）建設技術研究所　国土文化研究所）・後藤勝洋（公益財団法人リバーフロント研究所）・土屋信行（同）・木村達司（（株）建設技術研究所　国土文化研究所）・坂本貴啓（筑波大学大学院システム情報工学研究科）・白川直樹（筑波大学　システム情報系）

PI-36. **「堀田は再生できるか？　岐阜輪中地域における住民との協働による水郷景観再生の展望と課題」：「事」**

小林卓司（（株）修成建設コンサルタント　技術部）

PI-37. **「上西郷川における子供普請による川づくり」：「事」**

服部実佳子（九州大学大学院工学府 都市環境システム工学専攻）・林博徳（同 工学研究院環境都市部門）・富山雄太（同 工学府都市環境システム工学専攻環境都市部門）・池松伸也（同）・島谷幸宏（同 工学研究院環境都市部門）

PI-38. **「明治・大正期にみる河川プールの始まり」：「研」**

田代優秋（(公財) 公害地域再生センター／((一社) 地域資源研究センター）

セッションJ　湿地・水田・氾濫原

PJ-39. **「菊池川における河道形状変化に伴う氾濫原的水域の変遷と氾濫原依存種の生息場評価」:「研」**

岡村麻矢※（熊本大学工学部）・恒崎大輔（大分県）・皆川朋子（熊本大学工学部）

PJ-40. **「流水型ダム貯水池に整備された湿地の環境評価－西之谷ダム貯水池を対象に－」:「研」**

井上剛介※（国土交通省中部地方整備局木曽川下流事務所）・皆川朋子（熊本大学工学部）・中島淳（福岡県保健環境研究所）・羽生健吾（熊本大学工学部）

PJ-41. **「渡良瀬遊水地湿地再生事業における絶滅危惧植物の保全と再生」:「事」**

丹野幸太※（アジア航測（株））・久保田七海（同）・篠原光礎（同）・浅井樹（同）・小林英明（国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所）・後藤修（同）

PJ-42. **「渡良瀬遊水地湿地再生事業における外来植物等の生育抑制試験」:「事」**

丹野幸太※（アジア航測（株））・久保田七海（同）・篠原光礎（同）・小林英明（国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所）・後藤修（同）

PJ-43. **「兵庫県豊岡市の42の水田における水生動物群集の類型化-環境保全型水田の水生動物はリッチか？-」:「研」**

丸山勇気※（兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント）・佐川志朗（兵庫県立大学大学院/兵庫県立コウノトリの郷公園）・田和康太（兵庫県立大学大学院/滋賀県立大学）・内藤和明（兵庫県立大学大学院/兵庫県立コウノトリの郷公園）

PJ-44. **「ビオトープに生息するトノサマガエルの保全に関する研究～餌利用の把握～」:「研」**

竹原吏来※（北里大学大学院獣医学系研究科）・杉浦　俊弘（同　獣医学部）・馬場三久（同）

PJ-45. **「再導入後のコウノトリ*Ciconia boyciana*における餌生物の推定—飼育個体と野外個体で安定同位体比は異なるか？—」:「研」**

田和康太※（兵庫県立大学／滋賀県立大学）・佐川 志朗（兵庫県立大学／兵庫県立コウノトリの郷公園）・三橋 陽子（兵庫県立コウノトリの郷公園）

PJ-46. **「兵庫県豊岡市の冬水たんぼで越冬する水生動物群集」:「研」**

佐川志朗※（兵庫県立大学／兵庫県立コウノトリの郷公園）・田和康太（兵庫県立大学大学院／滋賀県立大学）・三浦豊彦（兵庫県但馬県民局）

PJ-47. **「中池見湿地における希少植物種の保全に向けた草刈り時期の検討」:「研」**

野一色麻人※（滋賀県立大学大学院環境科学研究科）・浜端悦治（同）

PJ-48. **「福井県越前市における過去・現在のコウノトリの生息地の状況について」:「事」**

藤長裕平※（越前市産業環境部農政課 コウノトリ共生推進室）・日和佳政（同）・村田薬師（（株）環境アセスメントセンター敦賀事務所）・関岡裕明(同)

PJ-49. **「湿原における水文環境モニタリング手法の検討」:「事」**

藤村善安（日本工営（株）中央研究所）

セッションK　自然再生

PK-50. **「重信川（愛媛県）における自然再生事業の最新事例の報告-開発霞自然再生事業における合意形成の視点から」:「事」**

甲斐崇※（（株）四電技術コンサルタント）・福井哲也（同）・鈴江 弘典（同）・野口和恵（同部）・大津洋暁（同）

PK-51. **「地元住人と行ったイシガイ科二枚貝類の農業水路からの救出と一時保管」:「事」**

三浦一輝※（北海道大学院　地球環境科学研究院）・斉藤裕也（ヤリタナゴ調査会）・伊藤一雄（NPO法人川島ネイチャークラブ）・大森秋郎(同)・根岸淳二郎（北海道大学院　地球環境科学研究院）

PK-52. **「大和川に造成したワンドにおける環境の変遷と今後」:「事」**

萩原大※（近畿大学農学部）赤尾大樹（同）・森尾憲（大阪府八尾市）・藤木得（同）・澤畠拓夫（近畿大学農学部）・河内香織(同)

セッションL　魚類生息環境

PL-53. **「堰堤下流部が傾斜路だと、底生魚が遡上できるときもある」:「事」**

田原大輔※（福井県立大学海洋生物資源学部）・岩崎雄介（同）

PL-54. **「山地上流域における個体群存続可能性分析（PVA）を用いた魚類の生息環境評価の試み～治山事業における活用事例～」:「事」**

有賀誠※（明治コンサルタント(株)）・中村太士（北海道大学）・高橋緑（明治コンサルタント(株)）・林友和（林野庁森林整備部治山課）・森田健太郎(水産総合研究センター)

PL-55. **「魚類分布・横断構造物・河川環境から考える木山川中流域の自然再生適地に関する研究」:「研」**

野口修司※（九州大学大学院）・山下奉海（同 持続可能な社会のための決断科学センター）・兵頭拓（同 大学院）・島谷幸宏（同 大学院工学研究院）

PL-56. **「遺伝情報を活用した河川事業に関する評価法の研究_その2」**

太田宗宏※（（株）建設環境研究所）・飛鳥川達郎(同)・安形仁宏（（株）建設環境研究所）・増本育子（中電技術コンサルタント(株)）・村岡敬子（独立行政法人土木研究所）

セッションM　河床環境評価

PM-57. **「付着藻類の現存量を左右する要因は何か？　～モデルを用いたダム下流における付着藻類の現存量の比較～」:「事」**

宮川幸雄※（（独）土木研究所自然共生研究センター）・萱場祐一（同 河川生態チーム）

PM-58. **「瀬切れ河川における河川整備計画段階の生息場所確保手法の提案」:「研」**

兼頭淳※（（株） 建設技術研究所）・三橋 弘宗（兵庫県立大学自然・環境科学研究所）・辻 光浩（滋賀県）・瀧 健太郎（同）、福永 智之（同）・北村 裕二（同）・竹内 義幸（（株） 建設技術研究所）

PM-59. **「山地河川に見られるステッププール構造が有機物の堆積に及ぼす影響」:「研」**

渡辺晋※（東京大学大学院工学系研究科）・知花武佳（同）・尾花まき子（名古屋大学大学院工学系研究科）・原田大輔（東京大学大学院工学系研究科）

PM-60. **「菊池川流域の地質と山地渓流のStep-Pool構造の関係」:「研」**

佐藤辰郎（九州大学持続可能な社会のための決断科学センター）・黒木 啓孝（九州電力）・大山 璃久（同 大学院工学府）・島谷 幸宏（同大学院工学研究院）

セッションN　河口域・干潟

PN-61. **「河川水辺の国勢調査（魚類）を用いた河川汽水域における生物生息適地モデルによる生息環境評価」:「研」**

前田義志※（国土交通省　国土技術政策総合研究所　河川研究部　河川研究室）・中村圭吾（同）・鈴木宏幸（同）・服部敦（同）・早坂裕幸（いであ(株)　国土環境研究所　生態解析部）

PN-62. **「ハゼ類およびカニ類を指標にした河口干潟のハビタット類型と環境特性」:「研」**

乾隆帝※（山口大学大学院理工学研究科）・赤松良久（同）・小山彰彦（九州大学生物資源環境科学

PN-63. **「植生管理用トレンチ内の水質と水生生物の環境評価に関する一考察」:「研」**

木塚綾※（佐賀大学大学院工学系研究科）・山西博幸（佐賀大学低平地沿岸海域研究センター）・長濱祐美（同）

PN-64. **「東京湾の魚類の生息場と生活史に基づく分類」:「研」**

秋山吉寛※（国土技術政策総合研究所）・井芹絵里奈(同)・岡田知也(同)

PN-65. **「淀川汽水域におけるヨシの生産・分解・呼吸に関する現地観測」:「研」**

田中孝一※（大阪府立大学工業高等専門学校）・川崎太輝（同）・大谷壮介（同）

PN-66. **「淀川湿地帯における春季のCO_2二酸化炭素フラックスの観測」**

鞠川純平※（大阪府立大学工業高等専門学校）・田中孝一（同）・川崎太輝（同）・大谷壮介（同）

PN-67. **「河口干潟の堆積物−水面における炭素収支の季節変化と水質・底質環境の関係」:「研」**

川崎 太輝※（大阪府立大学工業高等専門学校）・田中孝一（同）・大谷壮介（同）

PN-68. **「河川高水敷に造成されたワンドにおける形状とその維持状況との関係」:「研」**

浅井淳平※（東京大学大学院工学系研究科社会基盤学専攻）・原田大輔（同）・知花武佳（同）

PN-69. **「ヤマトオサガニの巣穴からの栄養塩回帰と藻類による固定」:「研」**

大谷壮介※（大阪府立大学工業高等専門学校）・上月康則(徳島大学大学院ソシオテクノサイエンス研究部)・山中亮一(同)

PN-70. **「河口域における淡水魚類の群集構造とその形成要因」:「研」**

満尾世志人（新潟大学　朱鷺・自然再生学研究センター）

PN-71. **「河川感潮域の多自然護岸による湿地再生と希少貝類の保全事例」:「事」**

酒井奈美※（西日本技術開発（株））・山根明(同)・林真希子(同)・
国土交通省九州地方整備局遠賀川河川事務所河川環境課

PN-72. **「多年度にわたる河口域潮間帯継続評価における研究連携と質的保障」:「研」**

桝本輝樹※（千葉県立保健医療大学）・齊藤肇(水研センター)・吉田稔(国土交通省関東地方整備局横浜港湾空港技術調査事務所)・中村匡（(株) 日本 N・U・S）・古殿太郎（いであ(株)）・風間真紀（同）・陶山典子（(株)ドリスジャパン）・会田真理子（東京海洋大）・西栄二郎（横浜国大）・黒住耐二（千葉県立中央博）・駒井智幸（同）・富川光（広島大・院）・中山聖子（東邦大京湾生態系研究センター）・多留聖典（同）・風呂田利夫（同）

PN-73. **「石炭灰造粒物による高有機泥が堆積した干潟での生物生息環境の改善について」:「研」**

中本健二※（広島大学大学院工学研究科）・樋野和俊（中国電力（株）電源事業本部）・柳楽 俊之（同）・日比野忠史（広島大学大学院工学研究科）

PN-74. **「海浜性植物ハマボウフウの保全対策技術―四日市港臨港道路(霞4号幹線)事業に伴う環境保全技術事例―」:「事」**

栗原 淳※（(株)環境アセスメントセンター）・葛山博次（三重自然誌の会）・関根洋子（(株)環境アセスメントセンター）・永翁智雄（同）・山口孝昭（国土交通省中部地方整備局四日市港湾事務所）

応用生態工学会　第 18 回東京大会　開催案内

開催日時　平成 26 年 9 月 18 日（木）～21 日（日）

日程：9 月 18 日（木）　研究発表会　ポスター発表、分科会、自由集会
9 月 19 日（金）　研究発表会　口頭発表、分科会、自由集会、懇親会
9 月 20 日（土）　総会（午前）、公開シンポジウム（午後）
9 月 21 日（日）　エクスカーション

会場：首都大学東京　南大沢キャンパス　12号館（八王子市）

本大会は，土木学会継続教育(CPD)プログラム認定に申請中です。

参加申し込み（研究発表会・総会・エクスカーション）

参加申込書(裏面)に必要事項を記入の上、右記へファックスして下さい。URLの申し込みフォームや、同じ内容のEメールでも受け付けます。なお、詳細は裏面をご参照ください。

●申し込みおよび問合せ先
応用生態工学会事務局
〒102-0083　東京都千代田区麹町4-7-5
麹町ロイヤルビル405号室
TEL：03-5216-8401　FAX：03-5216-8520
E-mail：tokyo_18th@ecesj.com

公開シンポジウム「地下を流れる水と応用生態工学の接点－健全な水循環の確保に向けて－」

公開シンポジウム
参加費：無料
同時通訳あり

<日時> 平成26年9月20日（土曜日）　13:00～16:30
<場所> 首都大学東京　南大沢キャンパス　12号館　201号教室

<開催主旨>

地下を流れる水は,地上や海底に湧き出た場所に特殊な生息場を作り出します. そのような特殊な場に依存する生きものも少なくありません. また、水が地下を移動することで,河川や海域の物質循環にも大きな影響を及ぼすことが知られるようになってきました. 一方,人間活動の影響は,水質・土壌汚染,地下浸透による水源涵養機能の低下,水域と地下の健全な水循環の阻害などを通じて,湧水が作り出す生態系に影響を及ぼしています.

これに対し,近年の安定同位体を用いた研究やシミュレーション・可視化技術の発展などがあり,地下を流れる水のマネジメント,健全な水循環のあり方が検討できるようになってきました. そこで,地下を流れる水の流れやその生態学的な機能についての研究事例、知見を共有し,土木技術と生態学の融合をめざす応用生態工学との接点を明らかにするとともに,マクロスケールな水循環とローカルな生態学的な現象をどのように絡めるか等の課題について議論を行い,これらを通じ,今後の研究の進展と自然再生事業等への応用の出発点となることを目指します.

<プログラム>

13：00　趣旨説明　横山 勝英准教授（首都大学東京）
13：10　講演１　「河川の伏流水と地形・植生の相互作用～イタリア・タリアメント川の事例～」
Walter Bertoldi博士（トレント大学,イタリア）
13：50　講演２　「沿岸地下水湧出による生態系の維持および水産資源への影響評価」
谷口 真人教授（総合地球環境学研究所）
14：30　講演３　「湧水生態系の実態と保全」　森　誠一教授（岐阜経済大学）
15：20　パネルディスカッション
コーディネーター：横山 勝英准教授（首都大学東京）
パネリスト　：Walter Bertoldi博士（トレント大学,イタリア）
谷口 真人教授（総合地球環境学研究所）
森 誠一教授（岐阜経済大学）
三輪 準二（国土交通省水管理・国土保全局総合水資源管理戦略室長）
石原 成幸（東京都土木技術支援・人材育成センター）
コメンテーター　：中村 太士教授（北海道大学）
16：30　終了予定

Our Life, with River
河川整備基金
公益財団法人河川財団による
河川整備基金の助成を受けています

後援（予定）：国土交通省関東地方整備局、東京都、河川財団、建設コンサルタンツ協会関東支部、土木学会関東支部、日本緑化工学会、日本景観生態学会、首都大学東京

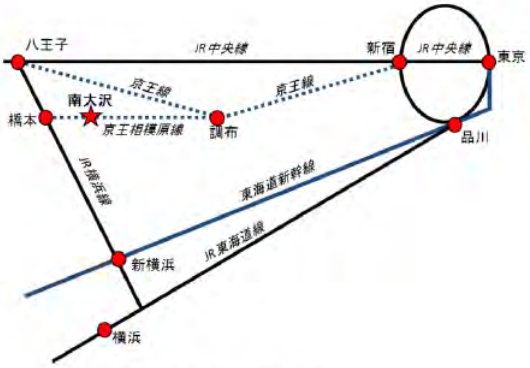
会場と交通（研究発表会・懇親会・公開シンポジウム）

首都大学東京　南大沢キャンパス

〒192-0397　東京都八王子市南大沢1-1

TEL　042-677-1111(代表)

http://www.tmu.ac.jp/university/campus_guide/access.html



★京王電鉄相模原線「南大沢」駅（特急以下すべての列車が停車します）下車
■「新宿」から約40分（京王線経由）
■「東京」から約1時間（JR中央線，「新宿」乗換え，京王線経由）
■「新横浜」から約55分（JR横浜線，「橋本」乗換え，京王線経由）

参加費（研究発表会・懇親会・エクスカーション）

研究発表会　　会員：6,000円、非会員：10,000円、学生(会員・非会員)3,000円
参加費には発表講演集代が含まれております．発表講演集のみ希望の方は，3,000円で販売しております．
※大会期間中に学食の営業はあります．南大沢駅周辺にも飲食店はあります．別途1,000円でお弁当の用意ができます．
参加申込みと同時にお申し込みください．

エクスカーション　①多摩川コース　正会員・賛助会員：3,000円,非会員：4,500円,学生(学生会員・非会員)：2,000円(昼食代含む).
（詳細はHPに掲載）　②小櫃川コース　正会員・賛助会員：2,000円,非会員：3,000円,学生(学生会員・非会員)：1,000円(昼食代含む).
※別途宿泊費(1泊2食付)6,500円+酒代を各自でお支払いください．※小櫃川コースの宿泊定員は20名．
③小櫃川日帰りコース：無料(昼食代は現地にて各自でお支払いください．送迎等により別途費用が発生する場合があります)

懇親会参加費　　¥5,000円（当日徴収します．人数把握のため事前にお申込みください．）

参加費振込先（研究発表会・懇親会・エクスカーション）

郵便振替口座
口座番号：00140－7－404275
口座名称：応用生態工学会

銀行振込口座
銀行名　：東京三菱銀行麹町中央支店
口座番号：(普通)1302920
口座名称：応用生態工学会(オウヨウセイタイコウガクカイ)

参加申込書（研究発表会・懇親会・エクスカーション）

申込締切りは2014年8月31日(日)迄
振込締切りは2014年9月 5日(金)迄

FAX 宛先 03-5216-8520　E-mail: tokyo_18th@ecesj.com

URL: http://www.ecesj.com/J/events/annual/18th_meet/18th_1st_callforpaper.html

(ふりがな) 氏　名			会員No.(正・学生・賛助)	
所　属				
連絡先 (自宅・所属) いずれかに○	〒 住所 TEL		e-mail:	
参加申込			参加費(必要箇所に✔)	
研究発表会 (発表講演集代込)	9月18日(木)－19日(金)	参加・不参加	□ 会員(6,000円)　□非会員(10,000円)　□学生会員(3,000円)	
懇親会	9月19日(金)	参加・不参加	当日徴収します(5,000円)	
エクスカーション	①多摩川コース(21日)	参加・不参加	□ 会員(3,000円)　□非会員(4,500円)　□学生会員(2,000円) 昼食代含む	
	②小櫃川コース(20日-21日)	参加・不参加	□ 会員(2,000円)　□非会員(3,000円)　□学生会員(1,000円) 昼食代含む．別途宿泊費(1泊2食)6,500円+酒代を各自で直接民宿へお支払いください．	
	③小櫃川日帰りコース(21日)	参加・不参加	無料　昼食代は現地にて各自でお支払いください． 送迎等により別途費用が発生する場合があります．	
昼食の注文	9月19日(木)分	必要・不要	□ 必要(1,000円)	大会期間中、学食は営業しています． 「南大沢」駅前にも飲食店はあります．
	9月20日(金)分	必要・不要	□ 必要(1,000円)	
	9月21日(土)分	必要・不要	□ 必要(1,000円)	
研究発表会に参加しないが、発表講演集のみ希望 (研究発表会に参加される方は研究発表会参加費に発表講演集代が含まれています．)			3,000円(送料込)　×　　部	
参加費の合計			合計　　円	
連絡事項	請求書を希望する場合は「請求書希望」と記載してください．			

４　2014 年度　海外学会派遣研究者・技術者の審査結果の報告

国際交流委員会　委員長　吉村千洋

１．国際交流委員会（委員長　吉村千洋）では、2014 年度海外学会派遣研究者・技術者の応募を行った。2 月 21 日から 4 月 11 日を募集期間として、学会ホームページ、ニュースレター、メーリングリストによる募集を行った。当初（4 月 11 日）の締切日までには応募がなかったため、締切日を５月２０日に延長した結果、3 名からの応募があった。

２．委員会では応募者 3 名の応募資格や申請内容などを審査し、研究内容や派遣の効果などを考慮し、2014 年度の派遣者は下表の 2 名とした。なお、今年度はすべての応募内容（3 名）において応用生態工学分野での研究や技術開発に関して派遣の意義が認められ、難しい選考となった（参考資料）。最終的に、各候補者に対する委員の推薦は、候補者１および候補者２が４票、候補者３が３票となったため、候補者１および２に対して助成することとした。そして、候補者１はヨーロッパ内の移動であるが、候補者２は日本からアメリカへの渡航となることを考慮し、候補者１に５万円、候補者２に１０万円を配分するという提案が承認された。

３．派遣研究者が学会参加した後には、その報告をニュースレターに掲載し、研究者からの決算報告を国際交流委員会で確認する。そして、学術誌（応用生態工学会誌もしくは LEE）への投稿も本派遣の必要要件としている。

表．2014 年度海外学会派遣研究者・技術者の詳細

派遣者１（候補者１）	
氏　名	八重樫 咲子（会員番号: 29031）
所　属	ライプニッツ淡水生態学・内水漁業研究所（IGB）
派遣希望学会	希望派遣学会等: Association for the Science of Limnology and Oceanology 開催会議等の名称: Aquatic Sciences Meeting 主催者名: 未定 開催月日: 2015 年 2 月 22 日から 27 日 開催国･地名: スペイン・グラナダ 現地見学会有無と内容: 例年通りであれば有 参加申し込み期限: 不明（2013 年は 10 月 5 日） 参加費: 不明（2013 年は 300-450US$） 研究発表を行うか否か: 発表予定
派遣者２（候補者２）	
氏　名	渡辺のぞみ（会員番号 30048）
所　属	北海道大学大学院環境科学院 博士後期課程 2 年
派遣希望学会	開催会議名: AGU Fall Meeting 2014 主催者名: American Geophysical Union 開催月: 2014 年 12 月（15～19 日） 開催国・地名: アメリカ・サンフランシスコ 現地見学会有無と内容: 未定 参加申込期限: 未定 参加費 $120: 前後（未定） 研究発表: 行う（発表要旨〆切：2014 年 8 月 6 日）

5　幹事会報告

応用生態工学会　第 60 回幹事会議事録

日時：2014 年６月 21 日（土）　10：00～13:00
場所：麹町学会事務所
出席：藤田幹事長、萱場副幹事長、沖津幹事、竹林幹事、田代幹事、東城幹事、中村幹事
西廣幹事、藤井幹事、三宅幹事、吉村幹事
欠席：仮谷幹事、佐川幹事、根岸幹事、横山幹事

4-1 報告事項

4-1-1【報告事項－１】第 70 回理事会報告

○　2014 年２月 13 日に開催された第 70 回理事会の報告事項・審議事項について、その内容が幹事長から報告された。

○　このうち、審議事項である「第３次中期計画の評価の取り組み」については、中期計画担当班が具体的作業を総括し、本年９月の総会において評価結果を報告する工程に従って評価作業が進められていることが報告された。

○　同じく審議事項である「韓国応用生態工学会との MOU 締結」については、MOU（Memorandum of Understanding）の締結交渉の開始が決定され、国際交流委員会が交渉担当となることが報告された。

4-1-2 【報告事項－２】第71回理事会報告

○　2014年４月25日から４月30日までの間、メール会議にて開催された第71回理事会の内容について、幹事長から報告があった。

○　この理事会においては次期委員会委員候補の提案が了承され、これを受けて2014年５月３日付けにて会長から各委員に対して委嘱が行われた。

4-1-3 【報告事項－３】第 18 回東京大会準備状況報告

○　第18回東京大会の準備状況について、東京大会連絡責任者の久保市浩右氏から報告があった。

○　東京大会連絡責任者の久保市氏から、幹事会主催の自由集会について検討促進の依頼があった。

4-1-4 【報告事項－４】会誌編集委員会報告

○　2013 年度第２回会誌編集委員会（2014 年１月 23 日開催）の議事録により、会誌編集の状況、投稿状況と促進策検討、会誌編集の効率化検討などについて、幹事長から報告があった。

4-1-5 【報告事項－５】国際交流委員会報告

（１）韓国応用生態工学会とのＭＯＵ締結交渉の状況

○　韓国応用生態工学会とのMOU（Memorandum of Understanding）締結に向けた状況について、幹事長から報告があった。

○　2014年５月８日に事務局長から韓国応用生態工学会国際協力委員会幹事の安洪奎さんあてにメールが送られ、2014年２月の理事会においてMOU協議を受けることが決まったこと、国際交流委員会が夏までには学会内の意見をまとめ、MOUについて回答する予定であることを連絡している状況にある。

（２）2014年度海外学会派遣研究者の決定報告

○　吉村国際交流委員長から、2014年度海外学会派遣者として、３名の応募者から次の２名の研究者を選考したことが報告された。

・八重樫咲子氏（ライプニッツ淡水生態学・内水漁業研究所）：助成額５万円

・渡辺のぞみ氏（北海道大学大学院環境科学院博士後期課程２年）：助成額10万円

○　募集方法などについて次のような意見があり、国際交流委員会において検討していくこととした。

・応募者が少ない理由として、例えば、海外学会の時期と募集のタイミングとの関係、周知の方法、助成額に魅力がないこと、論文投稿が重荷になっていることなどが考えられる。これらを考慮し、応募者を増やす仕組みについて引き続き検討する。

また、前年の大会における表彰受賞者を、翌年に海外派遣するという方法についても検討してはどうか。

・募集要項では、「学会としての助成額を15万円とし、原則一名、場合によっては２名を選考」とされているが、この表現では、２名選考された場合でも各人に15万円ずつ助成があると受け取られないか。

（３）その他

○　2014年６月９～18日に開催（メール会議）された2014年度第１回国際交流委員会において、第３次中期計画のアクションプランに対する評価、2015年度の事業計画について検討が行われ、その内容について吉村国際交流委員長から報告があった。

4-1-6 【報告事項－６】普及・連携委員会／全国活動運営班報告

（１）フィールドシンポジウム in 高知の開催報告

○　2014年６月13～14日に開催されたフィールドシンポジウム in 高知の状況について、仮谷幹事（普及・連携委員）から報告（幹事長が代わって報告）があった。

（２）普及・連携委員会から幹事会への審議依頼事項

○　６月14日に開催された普及・連携委員会において、幹事会に対する討議・検討依頼事項が４項目取りまとめられ、これについて検討を行った。

①依頼事項１：地域活動を実施していくうえで、核となる先生（学会に関連の深い先生、理事、幹事等）に地域を担当していただき、円滑に活動を実施していきたい。

このことについて、次のような議論があった。

・「理事の地方担当制度」については、これから地域が増える可能性もある中で、仕組みとして作ってしまうと経費や労力がかかるおそれがある。また、形式的、機械的に全国一律に設置しても意味がない。

・地域ごとに円滑に活動が実施されているところと、必ずしもそうではないところがあると思われる。円滑に活動が実施されている地域の状況を把握しつつ、困っている地域について、個別、具体に対応していくことが得策と考えられる。

・地域ごとに多様な状況にある中で、困っていることがあるのであれば、全国活動運営班を通じて幹事会で情報を把握し、必要に応じて適任の先生や行政を紹介することとする。

②依頼事項２：活動に対する助成金の予算化

普及・連携委員会の活動費については、2013年度においては第３次中期計画実行費として30万円が計上されていたが、2014年度及び2015年度においても同額を確保することとし、【審議事項－３】と【審議事項－４】のとおり、2014年度予算執行見通し及び2015年度予算案において、それぞれ30万円ずつを計上する案を理事会に諮ることとした。

③依頼事項３：各地域の銀行口座預金の使用や地域裁量の明確化

このことについては、幹事会として地域口座の運用状況などを把握していない状況にあるため、まずは事務局長を交えて実態を把握することとする。

また、地域研究会の意見も聞きながら、ルールについて検討を行っていくこととする。

④依頼事項４：地域研究会の活動の評価

このことについては、第３次中期計画の評価、次期中期計画の策定にあたって、地域ごとに実施してきたイベント開催や活動による会員サービス充実への寄与、会員数維持の効果など、「数値化されない評価軸」についても検討してみることとする。

（３）次年度の全国大会の実施方針（案）

○　幹事会の全国活動運営班から、次年度の全国大会の開催方針案（開催地、今後の検討スケジュールなど）について提案があった。

引き続き、全国活動運営班を中心に幹事会において検討を進めていくこととした。

4-1-7 【報告事項－７】テキスト刊行委員会報告

○ 萱場テキスト刊行委員長から、テキスト刊行の状況について報告があった。

○ 執筆担当者に対して目次を示して原稿依頼をしたところであり、８月末には原稿を取りまとめる予定。９月の全国大会では、自由集会において原稿を示したいとの報告があった。

4-1-8 【報告事項－８】情報サービス委員会報告

○　沖津情報サービス委員長から、ホームページ維持管理の状況、ホームページのリニューアルの作業状況について報告があった。

○　ホームページのリニューアルについては、９月の全国大会の前には新しいホームページを公開する、ただし、新ホームページの公開が大会の案内などに影響を及ぼすと判断される場合には、大会終了後の公開とする予定であることが報告された。

4-1-9 【報告事項－９】事務局改善ＷＧ報告

○　幹事長から、2014 年４月 23 日に開催された 2014 年度第１回事務局改善ワーキンググループ会議の状況について報告があった。

○　事務局改善ＷＧにおいては、財政の健全化に主軸を置いた活動を行い、財政健全化に向けて改善を必要とする課題を見出したときには、幹事会、各委員会等に報告し、各組織での検討に委ねることとしている。

また、財政安定化のために、まずは賛助会員の増加方策について検討を進めていくことが報告された。

4-1-10 【報告事項－10】ICLEE 状況報告

○　幹事長から、ICLEE 及び LEE の状況について、以下の報告があった。

・日本国内３学会の ICLEE 対応について、これまでのコアメンバーによる対応から、今年度からは ICLEE 日本国内運営会議が組織化されたこと。

・当面する課題について韓国側と検討するために、2014 年７月７日に韓国において ICLEE 日本国内運営会議のメンバーが出席して打合せが行われること。

・ICLEE の来期（2015～2016 年）の体制についての検討状況。

・LEE を購読料とページチャージで運営していく方策について検討が進められていること。

4-2 審議事項

4-2-1 【審議事項－１】第３次中期計画の評価作業

○　幹事長から、第３次中期計画の期間（2010 年度～2013 年度）が終了したことに伴い、第３次中期計画の評価作業が次の工程に従って進められていることが報告された。

・2014 年６月末までに、中期計画の各項目の実施主体（各委員会・幹事会・学会事務局）において、

アクションプランに関する実施状況、目標に対する達成状況、今後に向けた課題など、評価を実施。
・2014 年７月以降、中期計画対応班において、評価の取りまとめ・検討
・幹事会において審議
・第 72 回理事会（2014 年８月 22 日）において審議
・第 17 回総会（2014 年９月 20 日）において報告
○ 第３次中期計画において幹事会が実施主体となっている項目（骨子②：幹事会活動の強化充実）について、アクションプランに関する実施状況など、2013 年度末時点での評価の案を原案どおり承認した。

4-2-2 【審議事項－２】2013 年度決算報告

○ 幹事長から、2013 年度決算について次のとおり報告があった。
○ 2013 年度の収支差額は 5,237,658 円の黒字となったが、前年度に収入すべき会費等 2,115,550 円を含んでおり、実質黒字額は 3,122,108 円である。
収入総額では予算に対して 3,268,357 円の増、上記の 2,115,550 円を除くと 1,152,807 円増となった。収入増は、賛助会員の増、第 12 回 ISRS 国内組織委員会からの寄付金などによる。
支出総額では予算に対して 1,744,197 円の減となった。支出減は、英文誌関係の発刊関係費が 2014 年度回しになったこと、会誌編集費、会議費、委員会活動費などの減による。
○ 2013 年度の中期計画実行費では、1,530,000 円の執行を見込んでいたが、テキスト刊行経費、ホームページ改良費の執行が作業の進捗の結果、2014 年度回しになったことなどにより、632,263 円が未執行となった。
また、中期計画全体（2011～2013 年）では、一般会計に計上した予算額 3,700,000 円に対し、実施額は 3,551,793 円であり、ほぼ計画内執行額に収まった。

4-2-3 【審議事項－３】2014 年度予算執行見通し

○ 幹事長から、2014 年度予算の執行見通しについて、次のとおり説明があった。
○ 2013 年総会において決定された 2014 年度予算について、現時点の会務進行状況を加味して見直しを行った結果、1,165,000 円の赤字となる見通し。なお、このうち 650,000 円は昨年度予算の繰り延べ分を確保したものであり、実質赤字額は 515,000 円。
○ 支出に関して、主な見直しは次のとおり。
・普及・連携委員会費について、地域イベント助成費を新規計上。
・情報サービス委員会費について、活動費を新規計上。
・将来構想委員会費について、次期中期計画の構想立案などに向けて活動費を追加計上。
・技術援助委員会費について、活動費を新規計上。
また、河川砂防技術基準をもとにした意見交換が開始されることに伴い、このための経費を新規計上。
・HP 整備費として、ホームページのリニューアル経費の必要額 260,000 円を新規計上。このうち 130,000 円は 2013 年度の中期計画実行費の計上額であったが、作業の進捗状況を考慮し、2014 年度回しとなったもの。
その他費用として、250,000 円を新規計上。
・英文誌関連では、2013 年度分の英文誌事務局維持費の請求が今年度送りになった経費を計上。
また、ELR2012 の残金から戻された 300,000 円について、緊急的措置として事務局維持費に追加支出（国内３学会ともに実施）。
○ 以上に基づく 2014 年度予算執行見通し案を提案どおり理事会に諮ることとした。

4-2-4 【審議事項－４】2015 年度予算案

○　幹事長から、2015 年度の予算案について、次の方針のもとに作成した案の提案・説明があった。
・引き続き，収支を一致させる均衡予算とする。
・2013 年度で第３次中期計画が終了し、評価作業及び次期中期計画策定作業が継続中であるため、現時点で議論されている評価作業及び次期中期計画策定作業を一部反映した予算を編成する。
・支出項目のポイントは次のとおり。
　会誌編集費は、2013 年度実績は 2,002,187 円となったが、これは 2013 年度の論文数が例年に比べて減少したものであり、過去の実績を考慮して 2014 年度予算と同額の 2,800,000 円を確保。
　委員会活動費のうち、普及・連携委員会費、情報サービス委員会費、将来構想委員会費、技術援助委員会費は、2014 年度執行見通し額と同額を計上。
　国際交流委員会費は、国際シンポジウムに係る経費を確保。
　テキスト刊行委員会費については、出版に必要な経費の想定が予算案作成作業時点では不明であり、必要経費が明らかになった時点で、予算措置を講じる。
○　以上に基づく 2015 年度予算案を提案どおり理事会に諮ることとした。

4-2-5 【審議事項－５】学会規約の改正

○　幹事長から、学会規約の改正について、次のとおり趣旨説明があった。
　学会発足以来 17 年近くが経過し、最近に至って会員の入退会が頻繁化し、このうち特に退会者の増加傾向がある。
　学会規約には退会に関する規定は「資格の喪失」条項において設けられているが、その手続きが明確に示されていないことから、退会希望者からの手続きの問い合わせなどに時間を要している。
　また、会費滞納時の取り扱い規定が明確でないため、退会時には会費の納入状況を確認し、滞納がある場合は請求し、完済後に退会手続きを行っているが、一連の手続きが明文化されていないため、説明に労力を要している。
　このため、退会手続きを明確に示すとともに、学会規約において会費滞納時の資格喪失に関する規定を明確にすることによって、円滑な会員管理事務を推進する。
○　審議の結果、次の案を理事会に諮ることとした。
・学会規約において、退会に関する条項を新たに設ける。
・HP において、退会手続きを明確に示す。
・学会規約において、会費滞納時の取り扱い規定を明確にする。
・HP において、退会手続きの完了は、会費未納分の清算後であることを明確に示す。

4-2-6 【審議事項－６】学会優秀発表賞表彰規程の変更

○　三宅幹事（研究活動奨励班）から、優秀発表賞表彰規程について、優秀発表賞審査委員会や理事会の意見、昨年度の研究発表会での運営実績をもとに変更提案があった。
○　優秀発表賞審査委員会や理事会の意見として次のような意見があり、これについて対応を具体的に検討した。
・ポスドクやコンサルタントの受賞が多いのではないか。院生・学生に特化した賞をつくるべきではないか。
・受賞者が一部機関の発表者に偏っているのではないか。
・審査基準の「応用生態工学的な位置づけ」のウエイトを高めてはどうか。
・受賞者数が多いのではないか。
○　上記項目の検討に加え、昨年度の研究発表会での運営実績をもとに、優秀発表賞表彰規程について次のとおり変更する案を理事会に諮ることとした。
①昨年度運営実績等を受けての変更

・表彰式実施時を「公開シンポジウム開始前」から「総会終了後」に変更。
・優秀発表賞審査委員会の構成を「実行委員会＋担当幹事」から「実行委員会＋研究活動奨励班の理事・幹事」に変更。
②優秀発表賞審査委員会や理事会の意見への検討結果による変更
・賞の選考にあたっては，審査基準５項目のうち、「１）応用生態工学的な論点の明確さ（応用生態工学的な位置づけが妥当か？）」と、「５）今後の取り組みの参考になったか（応用生態工学の発展に寄与するか？）」の２項目について、それぞれ 1.5 倍した評価点の合計を参考にする。
○　三宅幹事から各幹事に対して、９月全国大会の研究発表会における審査員を依頼したいとの要請があった。

4-2-7 【審議事項－７】河川砂防技術基準をもとにした意見交換

○　国土交通省国土技術政策総合研究所河川部から 2013 年９月 21 日に「河川砂防技術基準をベースとした河川技術の検討に関する学会との連携」について提案があった。

これに対して、第 68 回理事会（2013 年９月 21 日開催）における審議の結果、国総研からの呼びかけについて対応することを決定し、幹事会において基本的スタンス、具体的方法について検討のうえ報告を求めることとされている。

その後の国総研との打合せ、意見交換準備会の結果を踏まえて審議した結果、「河川砂防技術基準をもとにした意見交換」として、次のとおり対応していくこととした。

○　学会としての対応方針
・この意見交換会を、河川管理の実務に学会の成果を反映できる機会と捉え、前向きな対応を行う。
・国総研とは対等の立場にたって、両者にメリットがあるように意見交換を進めていく
・学会員の考えを意見交換会に広く反映させる工夫を行う。また、この意見交換会における成果を学会員に還元するための工夫を行う。

○　学会の体制と進め方
・学会員の様々な考えを意見交換会に反映させるために、幹事会の技術援助活動班の中に検討チームを設け、学会内での意見集約、河川砂防技術基準に関する検討を行った上で、意見交換を行う。
・検討チームは意見交換会に出席する代表メンバー３名を含む数名程度のメンバーから構成する。

代表メンバー３名は幹事会からの推薦とし、これ以外の検討メンバーについては学会内で公募を行った上で、幹事会で決定する。

幹事会推薦の代表メンバーは次のとおり。

東邦大学西廣准教授（学会幹事）、名古屋大学田代准教授（学会幹事）、徳島大学河口准教授

なお、西廣幹事、田代幹事には、新たに幹事会の技術援助活動班に参画していただくこととした。（この議事録の末尾に添付した理事－幹事担当制の班構成を参照のこと。）

また、国総研との連絡・調整を含め、意見交換の取組みの進行総括は、技術援助活動班の主担当幹事である中村幹事が担当する。

・意見交換会での成果を学会員に還元するため、大会の自由集会等を活用し、幅広く会員とディスカッションを行う。

○　意見交換会は年２回程度継続的に実施していくこととし、今年度の予定は次のとおり。
・第１回：応用生態工学会の東京大会時（2014 年９月 18 日あるいは 19 日）
・第２回：2015 年３月 10～12 日に開催される土木学会水工学講演会時を想定（場所：早稲田大学理工学部）

4-2-8 【審議事項－８】応用生態工学会が関わる、沿岸環境関連学会連絡協議会との関係整理

○　幹事長から、沿岸環境関連学会連絡協議会との関係整理について、次のとおり趣旨説明があった。

・沿岸環境関連学会連絡協議会（沿環連）は 13 の学会・学会委員会をもって構成されており、応用生態工学会は 2006 年 3 月から参画している。

・沿環連には、各学会から選出された運営委員で構成される運営委員会が置かれている。
応用生態工学会からの運営委員は、九州大学清野聡子准教授、弘前大学東信行准教授とされている。
しかし、学会としての対応方針などを議論した経緯がなく、認識されていない状況にある。

・このため、学会としての方向性、運営委員メンバーの人選などについて、学会として認識する機会を設けてほしいとの要望があった。

○　審議の結果、幹事会の特命班の活動の中に沿岸環境に対する取組みを取り込んでいく方針を確認した。

（以　上）

第9期役員		財政・組織運営班	学術成果総括活動班	研究活動奨励班	技術援助活動班	広報班	全国活動運営班	国際交流／ICLEE対応班	中期計画対応班	特命班1
		事務局改善WGとのつながり	テキスト刊行委員会と連携	会誌のあり方については、会誌編集委員会と連携	技術援助委員会と連携	情報サービス委員会と連携	普及・連携委員会と連携	国際交流委員会と連携	将来構想委員会と連携	大規模災害からの復旧と環境保全・復元への応用生態工学の貢献
会長	谷田 一三									
副会長	中村 太士		◎					◎国際交流委員（担当理事）ICLEE日本国内運営会議メンバー	○将来構想委員長（担当理事）	
副会長	島谷 幸宏			◎						○
副会長	虫明 功臣									
理事	浅枝 隆							○LEE編集委員長 ICLEE日本国内運営会議メンバー		
理事	河崎 和明	○								
理事	久保田 勝	◎事務局改善WG委員長（担当理事）								
理事	藤原 宣夫									
理事	甲村 謙友								○	
理事	島崎 由美		○テキスト刊行委員（担当理事）			◎			○	
理事	清水 義彦									◎
理事	角 哲也			会誌編集委員	◎技術援助委員（担当理事）				◎	
理事	関 克己						◎			
理事	関島 恒夫		○テキスト刊行委員		○技術援助委員					
理事	高村 典子				○技術援助委員					
理事	成田 賢					○情報サービス委員（担当理事）				
理事	風呂田利夫			○会誌編集委員（担当理事）						
理事	渡辺 綱男						○普及・連携委員（担当理事）			
理事	渡邊 康玄				○技術援助委員					
幹事長	藤田 乾一	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑	↓↑
副幹事長	萱場 祐一		◎テキスト刊行委員長	会誌編集委員	○	◎情報サービス委員			○	
幹事	仮谷 伏竜		○テキスト刊行委員				○普及・連携委員			
幹事	田代 喬			会誌編集委員	○				◎将来構想委員	
幹事	藤井 政人	◎事務局改善WG委員	○テキスト刊行委員	会誌編集委員						
幹事	三宅 洋		○テキスト刊行委員	◎会誌編集委員					将来構想委員	
幹事	沖津 二朗					○情報サービス委員長				
幹事	佐川 志朗			会誌編集委員			◎			
幹事	竹林 洋史	○		会誌編集委員						
幹事	東城 幸治			○会誌編集委員						
幹事	中村 敏一				◎					
幹事	西廣 淳			会誌編集委員	○				○	○
幹事	根岸淳二郎		○	会誌編集委員				○国際交流委員	将来構想委員	
幹事	横山 勝英			会誌編集委員						◎
幹事	吉村 千洋			会誌編集委員				◎国際交流委員長 ICLEE日本国内運営会議メンバー		
		事務局改善WG委員長:久保田 勝	テキスト刊行委員長:萱場 祐一	会誌編集委員長:鎌田 磨人	技術援助委員長:辻本 哲郎	情報サービス委員長:沖津 二朗	普及・連携委員長:竹門 康弘	国際交流委員長:吉村 千洋	将来構想委員長:中村 太士	

◎:各班の主担当の理事・幹事
○:各班の副担当の理事・幹事

6　委員会報告

6-1 会誌編集委員会

6-1-1 平成 25 年度第２回会誌編集委員会

日時　：2014 年 1 月 23 日 16：00～18：00

場所　：麹町　応用生態工学会事務局

出席者：森委員長、大野委員、鎌田委員、小出水委員、西委員、風呂田委員、星野委員、山本委員、浅枝理事、小川事務局長

１）現在の会誌編集の状況について

・次号は議論しあう「意見」が２つ同時に載る予定である。また、編集作業の遅れが一部にあり、委員長から要請等を実施している。

・12 月にまた中国の方から投稿が直接に委員長にあった。正会員である必要と Web 投稿である旨を連絡して断った。

２）投稿の状況と促進策について

・不採択率がやや高いとの意見が出たが、これまで特に原因分析を実施したことはない。これまで委員会で申し合わせているように、「原著」として難しい場合は、「事例研究」で再投稿いただく等、掲載に持っていけるよう努力することとする。

・査読期間が長くなっているために修正投稿辞退が生じている可能性があるので、迅速な査読対応が必要である。

・2013 年はそれ以前と比べ投稿数が減少した。農業土木学会でも同じような傾向があり、大学院生の減少や英文誌への投稿が優先されていることが考えられる。英文誌 LEE では投稿は増えている。

・査読が厳しい、査読に長くかかるという評判が浸透している可能性があり、投稿促進策と会誌の方向性を検討するには、どういう人が投稿しているのか（行政、研究者、コンサル等）の分析が必要である。

・民間企業や NPO からの投稿を促すような工夫（宣伝等）ができないか。「レポート」はそのきっかけになることが期待できる。また、学会発表などにも目を配り、投稿を促進するよう努める。

・「レポート」については、コンサルタントが書き方を指導するようなこと、特集企画で出してもらうこと等が考えられる。

・役員が論文作成を指導し、連名で投稿するというような働きかけも今後必要となるのではないか。

・大会での公開シンポジウムの成果等を、会誌の特集にするような働きかけが必要であり、大会実行委員会で検討する。自由集会で実施した震災を題材にした特集を検討したい。

・特集を組む場合は、従来のように担当編集を決め、早期に動かすようにする。

・論文投稿の奨励を行政の方に推進してもらいたい。将来的にはプロポーザルや総合評価で論文投稿の実績が高く評価されるようになるとよい（CPD の強化によりその流れは強まりつつある。）。

３）編集・査読システムについて

・査読システムは以前よりは良くなったが、慣れないと扱いづらい面もあり、継続的なサポート体制（担当委員）が必要である。

・査読を早める対策の１つとして、関係者には編集システムへ専門分野を記載してほしい。関係当該者には再度連絡を入れ、記載必要の周知をする。専門分野が不明のため、査読者や編集委員候補者選びに時間がかかることがある。

４）会誌編集の効率化等について

・若い会員を中心に、冊子体は不要で会費が減額される方がよいと思う方が多いのではないか。

・JSTAGE での論文公開は、現在冊子刊行から２年後である。これを刊行後すぐに公開し、合わせて冊子体での発行数を減らすことが考えられる。これは論文投稿者にはメリットがあるが、会誌を購読している会員のメリットが小さくなる。

・このような方策を検討する場合は、冊子体での会誌の発行削減（会費低減）に関するアンケート、会員の意向確認が必要である。他学会でも冊子体についてアンケートを実施し、その結果冊子体での発行を減らしても会員はそれほど減らな

かった実績がある。
・編集委員が自ら編集作業を行い、編集費を削減することも考えられる。
・現在 LEE で実施しているように、会員外でも投稿料をもらって掲載することも今後検討が必要である。三学会の連携促進のため、投稿資格をお互いに認めるというのもありえる。
・会誌の厚さについて今後予算を考慮して平準化を図るには、年間のページ数の目安を作るべきである。現在より厚くして維持するか、これまでの平均的なレベルで維持するのか等を検討し、理事会・幹事会に方向性を提示する必要がある。
５）「レポート」の投稿促進について
・編集ステム上では現在「事例報告」と表現されており、規程に合わせて「レポート」と変更する。（実施済み）
・昨年にメーリングリストで広報したことに続き、2/19 のニュースレターに「レポート」募集について載せる。
・ece-ml とは別に事務局からは全会員に直接流せるメールリストがあるので、こちらを利用して広報することがよい。学会ホームページにも掲載するのがよい。
・現在「レポート」原稿を１つ預かっている。編集委員で検討し、どのような形にして投稿してもらうのがよいか等を検討する。「レポート」は「事例研究」ではないので、できるだけ考察を省いておくことがよいのではないか。
・他のところで発表したものの焼き直しは受け付けられないが、大会での発表（講演要旨集）などはグレーゾーンではあるが受け入れてはどうか。
・大会の講演要旨集の原稿を簡素化し、逆に今のような枚数の多い要旨を「レポート」として会誌に投稿してもらうのはどうか。大会運営にもメリットが出るかもしれない。
・「レポート」投稿についてのＱ＆Ａの整備が必要だろう。
６）次期編集委員会の体制について
・現在の委員については、留任の意向等について確認する。
・退任を希望される委員については、内規に従い後任を推薦いただくことにする。
・編集委員会としては、若い研究者が多い現在の幹事メンバーに会誌編集委員にも就任いただけるようお願いしたいと考えており、理事会の意見をいただきたい。
・編集委員長については、例年４～５月に委員会を開催しているので、そこで互選で選ばれることとなる。
・今後編集委員になっていただきたい方としては、統計解析、化学分野・安定同位体等に詳しい人等が最近の周辺分野を含め論文内容の動向からは必要である。そのような方の推薦を編集委員・役員にお願いしたい。

以上

6-1-2　2014 年度　第１回会誌編集委員会

日時：2014 年 6 月 21 日　14：00～16：00
場所：麹町　応用生態工学会事務局
出席者（五十音順）：鎌田委員長、萱場委員、小出水委員、竹林委員、東城委員、西委員、西廣委員、比嘉委員、藤井委員、風呂田委員、三宅委員、森委員、藤田幹事長

議事
１）委員長挨拶、自己紹介

２）編集副委員長の選出
・竹林委員が副委員長に推薦され、承認された。

３）前回(2014.1)議事録の確認　（報告事項）
・確認のうえ、承認された。

４）会誌発行状況、編集作業の進捗状況

①特集について

・編集委員長あてに、特集企画の申込みがあった（土木研究所自然共生研究センターの原田氏より。「河床の見方 - 水理学と生態 学, 河川中上流域を中心として - 」）。これについて審議し、了解を得た。

・ただし、著者陣が自然共生センターの方が多いため、「外部に特定の機関に便宜をはかっているように映るのでは」との意見が出た。これに対し、以下の対応を行うこととなった。

a）査読は従来と変わらない基準で行う。

b）本特集の編集担当は、鎌田編集委員長（生態学）と竹林副編集委員長（水理学）とする。

c）必要に応じて、鎌田・竹林でコメントを述べる。

・なお、17 巻 2 号に掲載することを目指して、原稿の作成、投稿及び査読を行うこととする。

５）編集システムの操作法について

・編集システムに専門分野を記載することが、査読者選定の効率化になり、もって査読期間の短縮が図れるため、今後もこれの状況をチェックし、委員や査読経験者により周知して記載を依頼する。

・システムの不明な点については編集委員会担当委員（西）に確認する。

６）編集システムに関する JST からの連絡について

・編集システムが無料で利用できなくなる可能性があり、今後考えられる対策の方向性を検討する必要がある。

７）今後の会誌の在り方、編集迅速化・投稿促進対策

①投稿数の減少について

・投稿数の減少は、査読期間の長期化（集計したところ 2011/9 以降で平均 184 日）が一因の可能性がある。土木学会の英文誌でも 100～200 日であり、あまり長くなると、博士後期課程の学生は投稿できない。

・投稿数の減少に対しては、従来応用生態工学会はできるだけきめ細かい指導をして受理に持っていくことが申し合わせ事項になっているが、受理率をさらに上げる必要もあるかも知れない。

・査読を依頼する場合は、システムで行うと同時に、私信メールを送信する方がよい。

・査読期間を短く（見せる）方法としては、要修正と判定するのではなく、リジェクトして再投稿させるという方法もある。近年はこの形をとる学会が増えている。

・判定にリジェクトではあるが、再投稿を促すという分類があってもよい。（〇〇リジェクト？）

・担当編集委員が査読者をなかなか見つけられないときに、編集委員同士が情報交換できるメーリングリストがあるとよいのではないか。分野によるどうしても手薄なところもあり、情報管理はしっかりする必要があるが、メーリングリストは有効と思われる。

・コンサルタントがもっと投稿するような仕組み、仕掛けを考えていく必要がある。たとえば行政に働きかけて、死蔵される報告書の内容が表に出ていくようにすることが必要である。そのためには学会の役員や編集委員等が働きかけ、事例研究が大事という意識を高めることが考えられる。

・編集委員の中に、「行政等への働きかけ担当（チーム）」を決め（その担当は論文査読案件を持たない）、行政の紹介記事を作る、レポート投稿を促す等を行うという体制が考えられる。レポートが増えれば投稿数は伸びる可能性がある。

・行政から、レポート等で出してもらえそうな案件の「リスト」を定期的に出してもらうという方法も考えられる。

・これらに関連して、現在「事例研究」が「原著」に近いくらい厳しめにみられているとしたら、「原著」の定義・枠を拡げるという方向性も考えられる。

８）第３次中期計画の中間評価について

・他の項目で出ているような取組と課題を整理することで、中間評価とする。その文案については西が調整する。

９）編集委員会の体制について（担当編集、編集幹事等）

・編集委員会の体制として、各委員の機能分担ができないかと考えている。例えば、a)幹事会、理事会との連携班（これは運営等主に事務的な話）、b)行政や現場とのつなぎ役班（藤井さん等）、編集班（論文審査をしっかりやるメンバー）に分けることが考えられる。このようにして例えば運営の簡素化が図れないか、検討の必要がある。

・また、ある課題について、編集委員会で議論するのか、幹事会で議論するのかを明確にしておくことが望ましい。例えばどういう雑誌にするのか等の会誌の性格付けは幹事会での議論がよいのではないか。

・アルバイトで「編集幹事（主に編集作業の工程管理）」を雇用することを考えたい。システムを使えば遠隔地でも進捗チェックはできるので、月１万円程度でできないか検討する。（浦川さんに打診予定）。これが現在の編集委員会予算でまかなえない場合は、中期計画で予算を取ることもありうる。

７　2014 年度行事案内　　平成２６年度　応用生態工学札幌セミナー

応用生態工学会　札幌

テーマ　「本来の川を取り戻すために…その９，“川の Resizing”」

応用生態工学札幌では、昨年度、「水・土・緑（生物）をレジームで捉える」をテーマに、「レジーム（体制，仕組み，基本構造）」といった大局的な見方で、砂礫河川のメカニズムや再生に向けたシンポジウムと現場視察（十勝川水系札内川）を行いました。

今年度は、自然や社会のシステムが大きく変化していることを認識し、かつ、今後の変化を見据えて、“resizing”をキーワードに自然再生や河川管理の在り方について考えていきます。例えば、土地利用、流況や土砂供給、河畔林の生育条件…等々が変化した現代（変化するであろう未来）の“川の形状”を話題にします。恒例の水路実験も行います。

日　時：２０１４（Ｈ２６）年８月２８日（木）
　　午前の部　水路実験　１０：００～１１：３０（寒地土木研究所　第４実験棟）
　　午後の部　セミナー　１３：３０～１７：４５（札幌市教育文化会館）

場　所：寒地土木研究所　　（札幌市北区北 8 条西 3 丁目[地下鉄中の島　徒歩１分]）
　　札幌市教育文化会館（札幌市中央区北 1 条西 13 丁目［地下鉄西 11 丁目　徒歩 5 分］）

主　催：応用生態工学会札幌
共　催：(独法)土木研究所　寒地土木研究所
協　力：国土交通省 北海道開発局

定　員：120 名（先着順ですので、定員に達し次第締め切る場合がございます）
参加費：水路実験・セミナー　3,000 円（学生無料）　／　懇親会 4,500 円
　　※午前、午後のどちらかだけでも 3,000 円です。
申込先：北海道大学大学院農学研究院森林管理保全学分野　森林生態管理学研究室（中村研究室 近藤）
　　sapporo.nakamuraken@gmail.com（8 月 25 日締切り）

応 用 生 態 札 幌 セ ミ ナ ー

「本来の川を取り戻すために…その９，“川の Resizing”」プログラム

平成 26 年 8 月 28 日（木）

午前の部

「水路実験」　寒地土木研究所

司会進行：　根岸　淳二郎（応用生態工学札幌副代表）

9：30～　　受付

10：00～11：30　水路実験

池田　宏　さん　（元筑波大学教授）

・土砂（量・粒径）や流量が変化したとき、川の形状はどうなるか？

・川の形状を変化させたとき、土砂はどのように運搬（堆積）されるか？

等の実験を企画しています。

午後の部

「セミナー」　札幌市教育文化会館

司会進行：船木　淳悟（土木研究所寒地土木研究寒地河川チーム上席研究員）

13：00～　　受付

13：30～　　挨拶／基調講演者の紹介　　中村太士　（応用生態工学札幌代表）

13：30～14：30　基調講演　「次世代に語り継ぎたいこと」

尾田　栄章さん　（渋谷川ルネッサンス代表／旧建設省元河川局長）

14：30～14：40　休　憩

14：40～15：10　趣旨説明　「川のリサイジング」

中村太士代表（北海道大学大学院農学研究院 教授）

15：10～15：40　講演「河道掘削による流下能力の確保と氾濫原環境の再生、その効果と課題」

萱場　祐一さん(土木研究所河川生態チーム上席研究員)

15：40～16：10　講演「河川における物理構造と各種生態系機能・サービスの定量化（仮)」

根岸淳二郎副代表（北海道大学大学院地球環境科学院 准教授）

16：10～16：40　講演「北海道開発局の河川環境保全への取り組み」

岡部　博一さん　（北海道開発局河川計画課 課長補佐）

16：40～16：50　休　憩

16：50～17：45　総合討議の時間

コディネーター：中村太士

各講師（尾田さん、池田さん、萱場さん、岡部さん、根岸）

17：45　～　　挨拶：　浜本聡（土木研究所寒地土木研究所寒地水圏研究グループ長）

18：00～　　懇親会

会場：ロイトン札幌

（札幌市中央区北 1 条西 11 丁目[シンポジウム会場から徒歩 2 分]

会　費　4,500 円

H26年度 セミナー 8/28（木） 開催 参加者募集！！

2014年8月28日（木）

応用生態工学会札幌セミナー

「本来の川を取り戻すために…その9」

主催：応用生態工学会札幌
共催：㈱土木研究所 寒地土木研究所
協力：国土交通省 北海道開発局

川のResizing

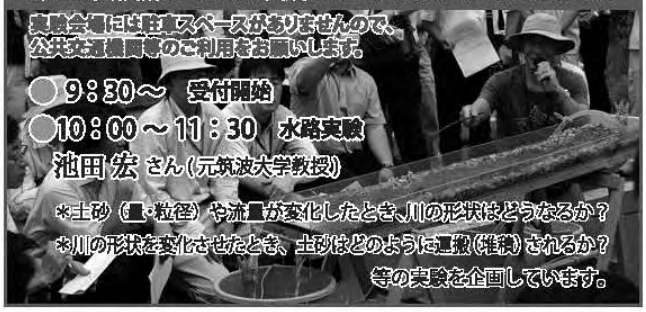
応用生態工学会札幌では、昨年度、「水・土・緑（生物）をレジームで捉える」をテーマに、「レジーム（体制，仕組み，基本構造）」といった大局的な見方で、砂礫河川のメカニズムや再生に向けたシンポジウムと現場視察（十勝川水系札内川）を行いました。

今年度は、自然や社会のシステムが大きく変化していることを認識し、かつ、今後の変化を見据えて、"resizing"をキーワードに自然再生や河川管理の在り方について考えていきます。例えば、土地利用、流況や土砂供給、河畔林の生育条件…等々が変化した現代（変化するであろう未来）の"川の形状"を話題にします。

恒例の水路実験も行います。

①午前の部：水路実験 10：00～11：30

寒地土木研究所 第4実験棟／札幌市豊平区平岸1条3丁目［地下鉄中の島 徒歩5分］



②午後の部：セミナー 13：30～17：45

札幌市教育文化会館／札幌市中央区北1条西13丁目［地下鉄西11丁目 徒歩5分］

司会進行／船木 淳悟（土木研究所寒地土木研究所寒地河川チーム上席研究員）

●13：30～ 挨拶／基調講演者の紹介
中村 太士（応用生態工学会札幌代表）

●13：30～14：30 基調講演
「次世代に語り継ぎたいこと」
尾田 栄章 さん（渋谷川ルネッサンス代表／旧建設省元河川局長）

●14：30～14：40 休憩

●14：40～15：10 趣旨説明
「川のリサイジング」
中村 太士 代表（北海道大学大学院農学研究院 教授）

●15：10～16：40 講演（各30分）
「河道掘削による流下能力の確保と氾濫原環境の再生、その効果と課題（仮）」
萱場 祐一 さん（土木研究所河川生態チーム上席研究員／自然共生研究センター長）
「河川における物理構造と各種生態系機能・サービスの定量化（仮）」
根岸 淳二郎 副代表（北海道大学大学院地球環境科学院 准教授）
「北海道開発局の河川環境保全への取り組み」
岡部 博一 さん（北海道開発局河川計画課 課長補佐）

●16：40～16：50 休憩

●16：50～17：45 総合討論
コーディネーター：中村 太士
各講師（尾田さん、池田さん、萱場さん、岡部さん、根岸さん）

●17：45～ 挨拶／閉会
浜本 聡（土木研究所寒地土木研究所寒地水圏研究グループ長）

※③懇親会 18:00～ ロイトン札幌

③懇親会 18：00～20：00（予定）

会費 4,500円／一人
場所：ロイトン札幌 札幌市中央区北1条西11丁目
［シンポジウム会場から徒歩2分］

参加費 3,000円／一人（学生無料）

定員：120名
※午前、午後のみ参加も3,000円です（懇親会費4,500円別途）。
※先着順ですので、定員に達し次第締め切る場合がございます。

申込締切 8/25（月）

■参加申込：E-mailのみ 勝手とは存知ますが、事務の簡素化のためメールのみの受付とさせていただきます。

E-mail → sapporo.nakamuraken@gmail.com 近藤 綾佳（北海道大学大学院農学研究院 森林管理保全学分野 森林生態系管理学研究室）

《申込記載事項》

（1）送信タイトル：【応用生態工学会札幌セミナー参加申込】
（2）メールには以下の内容を記入してください。
❶氏名・フリガナ・性別 ❷所属先 ❸連絡先（所属先・自宅の別を明記の上、郵便番号・住所・TEL・メール） ❹参加申込事項（午前の部、午後の部、懇親会） ❺合計参加料 ❻申し入れ事項（貴機関の経理上請求書等が必要、事前振り込みが困難、当日に領収書が必要 等ありましたらご記入ください）

◆ 参加料振込み ◆

事務部からの受付完了の連絡を受けてから
8/26（火）までにお振込ください。

指定口座
銀行名 北洋銀行 北七条支店
口座名義 応用生態工学札幌 中村太士
口座番号 （普通）3787550

7　2014 年度行事開催報告　　第４回　遠賀川中島自然再生研究会

応用生態工学会　福岡
酒井 奈美（西日本技術開発㈱）

応用生態工学会福岡の取り組みとして、ニュースレターNo.64 でお知らせした遠賀川中島自然再生研究会を開催いたしましたのでご報告いたします。

＜遠賀川中島について＞

中島は、九州北部、一級河川遠賀川の下流に位置する中州で、国土交通省による遠賀川中島自然再生事業の対象地です。自然再生事業では、遠賀川の流域や河川で失われた湿地を創出し、多様な生物が生息する河川環境を再生することを目的に、掘削による湿地の再生やヨシ原の保全などを行い、次世代に引き継ぐ未来の遠賀川の川づくりが行われています。

＜遠賀川中島自然再生研究会の概要＞

応用生態工学会福岡では、平成23年度から「遠賀川中島自然再生研究会」を立ち上げ、国土交通省遠賀川河川事務所より中島を研究フィールドとして提供頂き、学会員を中心とする研究会メンバーにより、応用生態工学的な研究を進めています。

本研究会は、異分野の研究者同士の交流が促進されることに加え、得られた成果を行政や市民の方にも知ってもらうことで、地域の自然環境の改善や学会の普及に繋げることを主な目的としています。

研究会では、年に1回の研究発表会を開催しているほか、必要に応じて現地視察や湿地改良の助言などの取り組みを行っています。

遠賀川中島自然再生研究会　役員（敬称略）
　会長：島谷　幸宏（九州大学）副会長：荒井　秋晴（九州歯科大学）
　顧問：小野　勇一（北九州市顧問）事務局：応用生態工学会福岡
会員の主な所属：大学・研究機関・国土交通省・市民団体・コンサルタント・財団法人
主な研究分野：魚類・二枚貝・植物・水生昆虫・哺乳類

＜第４回研究会内容＞

日時：平成 26 年 7 月 23 日（水）14：00～17：20　場所：遠賀川水辺館　参加者：43 名　参加費：無料
概要：今回の研究会では九州内外のさまざまな分野の方に参加いただきました。
二枚貝の生息状況と洪水に適応した分散等について、湿地の植生遷移や外来種との競合などについて、哺乳類の生息と中島の環境との関わりについての研究発表が行われたほか、前年度に試験実施した湿地改良箇所の生物の定着状況や自然再生事業モニタリング、市民団体（自然再生協議会）による竹炭づくりや観察会などの活動報告が行われました。また、遠賀川河口の多自然魚道での研究発表もあり、流域にも話題が広がりました。
中島では多様な生物の生息する湿地環境が形成される一方で、ヒシの繁茂や湿地の陸化などの変化もみられることから、意見交換の時間では、今後予想される環境の変化、氾濫原的湿地を維持するための方策や市民と河川環境との関わり方などについて、活発な議論が交わされました。

＜今後の予定＞

研究会は概ね年1回程度の頻度で開催する予定です。なお、今後のご案内は学会メーリングリストで行います。

遠賀川中島自然再生研究会では、どなたでも参加できる会です。研究会の聴講、研究の参加ともにお待ちしております。

【問い合わせ先】応用生態工学会福岡　酒井（n-sakai@wjec.co.jp）

研究会の様子

６　2014 年度　年間行事予定

	2014 年度（平成 26 年度）開始
2.21～5.20	海外学会派遣研究者の公募、再公募
4.16	応用生態工学会東京大会第 2 回実行委員会　　（首都大学東京大沢キャンパス）
4.25～4.30	第 71 回理事会（メール会議）第 9 期委員依嘱を了承
5.29	ニュースレター64 号　発行
6	テキスト刊行委員会　（麹町：応用生態工学会事務所）
6.13～14	第 6 回　応用生態工学会全国フィールドシンポジウム in 高知 6 月 13 日　フィールドツアー　仁淀川、高知海岸、四万十川 6 月 14 日　シンポジウム「アユをとりまく土佐の人」　（高知市文化プラザかるぽーと 11 階　高知中央公民館大講義室）
6.14	第 1 回普及･連携委員会　（高知市）
6.9～18	国際交流委員会（メール会議）海外学会派遣員審議
6.14	＜後援＞　　シリーズ「大槌学の地平から考える復興」シンポジウム　（大槌町）
6.21	第 60 回幹事会　（麹町：応用生態工学会事務所）
6.21	会誌編集委員会　（麹町：応用生態工学会事務所）
6.23	海外学会派遣研究者の決定、通知
7.23	第 4 回遠賀川中島自然再生研究会　（遠賀川水辺館　直方市）
7.25	応用生態工学会東京大会第 2 回実行委員会　（麹町：応用生態工学会事務所）
8.8	ニュースレター65 号　発行予定
8.22	理事会開催
8.28	平成２６年度　応用生態工学札幌セミナー 「本来の川を取り戻すために…その９，“川のリサイジング”」
8	会誌「応用生態工学 Vol. 17-1」（発行予定）
9.18～21	応用生態工学会東京大会　（首都大学東京　南大沢キャンパス　12 号館） 9 月 18 日（木）：研究発表（ポスター），分科会，自由集会 9 月 19 日（金）：研究発表(口頭)，分科会，自由集会，懇親会 9 月 20 日（土）：午前：役員会・総会等，午後：公開シンポジウム 9 月 21 日（日）：エクスカーション
9.20	理事会、幹事会　（首都大学東京　南大沢キャンパス　12 号館）
10.24～25	北信越ワークショップ in 長野 平成 26 年 10 月 24 日（金）・ワークショップ（講演及び報告、ポスターセッション等） 平成 26 年 10 月 25 日（土）・・・現地見学会 テーマ　『上下流の連続性を考える』

11.14	応用生態工学会第2回北信越事例発表会　　（富山県立大学　射水市）
12.上旬予定	第２回応用生態北信越技術研究会　　（富山市 神通川）
12	幹事会
12	ニュースレター66号　発行予定（東京大会特集）
12	会誌「応用生態工学Vol. 17-2」発行予定
2.	2015年度海外学会派遣者募集
2	理事会
2.21	ニュースレター67号　発行予定
2014年度終了	

7　事務局より

18回大会会場を予定している「首都大学東京大沢キャンパス」を訪問しました。　八王子にある学校という認識はありましたが、新宿から京王線で40分、大学のある南大沢駅に着きました。　駅をおりて右を見るとそこがもう首都大学東京大沢キャンパスの入り口でした。　予想より足の便が良い印象でしたが、キャンパス内はかなり広大なので、会場までは少し時間の余裕が必要です。　ここで熱気あふれる会場風景を今年も見たいものです。

会員のメールアドレス、勤務先、自宅住所など会員情報に変更があった時は，忘れず下記の連絡フォームからご連絡下さい。　メールアドレスが変更されたため配信できない場合や、会誌をお届けする住所が変更され、配達不能が頻発していますのでご留意下さい。

- 会員登録情報変更連絡フォーム
  http://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change

＊＊

[2013 年 7 月 26 日現在会員数]

個人会員

名誉会員：　　4 名
正 会 員：　982 名
学生会員：　123 名
合　　計：　1109 名

賛助会員

賛助会員：　32 社（47 口）